

# ひかげの花

永井荷風

青空文庫



二人の借りている二階の硝子窓ガラスまどの外はこの家の物干場ものほしばにな  
 っている。その日もやがて正午ひるちかくであろう。どこからともな  
 く鱒いわしを焼く匂においがして物干の上にはさつきから同じ二階の表座敷おもてを  
 借りている女が寢衣ねまきの裾すそをにかけて頻しきりに物を干している影が磨すりが  
 硝子ラスの面に動いている。

「ちよいと、今日は晦日みそかだったわね。後あとであんた郵便局まで行っ  
 てきてくれない。」とまだ夜具の中で新聞を見ている男の方を見  
 返ったのは年のころ三十も大分越したと見える女で、細帯もしめ

ず洗いざらしの浴衣ゆかたの前も引きはだけたまま、鏡台の前に立膝たてひざして寝乱れた髪を束ねたばている。

「うむ。行って来よう。火種ひだねはあるか。この二、三日大分寒くなつて来たな。」と男はまだ寐ねたまま起きようともしない。

「今年ことしも来月ひとつき一月だもの。」と女は片手に髪を押え、片手に陶器まるひばちの丸火鉢を引寄せる。その上にはアルミの薬罐やかんがかけてある。

「うむ。月日のたつのは全く早いな。来年はおれもいよいよ厄やくど年しだぜ。」

「そう。全く憂鬱ゆううつになるわよ。男は四十からが盛りだからいいけれど、女はもう上つたりだわ。」と何のはずみだか肩を張つて大きな息をしたのが、どうやら男には溜息ためいきをついたように思わ

れた。

「誰だつて毎年年としはとるにきまつているからな。」と男は俄にわかに申もうしわけ

訳訳らしく、「まあいいやな、こうして暮して行けれア何も愚ぐ痴ちを言う事はない。別に大した望みがあるじゃなし……なアお千代、おれは全くこうして暮していられば結構だと思つてゐるんだ。」

「それはそうよ。だけどこうして暮して行けるのも永いことはないわよ。もう……。」

「もう。どうして。」

「どうしてツて。わたしとあんたとはいくらも年がちがわないんだもの。わたしの方じゃ稼かせぐつもりでもお客の方が……。」と言

いながら女は物干台の人影ひとかげに心づいて急に声をひそめる。男は夜具から這出はいだして、

「そうなれば、おれも男だ。お前にばかり寄よツかかつていやしい。お前はおれの事を意気地いくじなしだ——それアあんまり意気地のある方ほうでもないから何と思われても仕様がなすが、おれだつて行末の事を考えずにこうしてぶらぶらしているんじゃない。年を取つてから先の事はいつでも考えている。だから、お前の稼かせぎは今までだつて一厘いちりん一銭いっせんだつて無駄遣むだづかいをした事はないだろう。それアお前もよく知つているはずだ。なアお千代。」

囁ささやくような小声ながらも一語ひとこと一語ひとこと念を押すように力を入れ、ぴつたり後うしろから寄添よりそつていつか手をも握りながら、「お前、もう

おれがいやになつたのか。」

「そんな事……だしぬけに何を言うのさ。」とびつくりした調子で女は握り合つた男の手をそのまま、乳房の上に押当てた。

裏口の引戸ひきどを開ける音とともに物干台に出ていた女がどしんと板の間まへ降りる物音。つづいて正午のサイレンが鳴り出す。女は思おも直いなしたように坐り直つて、

「もうそんな話、よしましょう。ねえ、あんた。じゃア後あとで郵便局へ行つて来て下さいねえ。」

「うむ。じゃア今の中うち……飯を食う前にちよつと行つて来よう。」男は立上つて羽織も一ツに襲かねたまま壁かに引掛ひけてある擬銘まが。仙せんの綿わた入いれを着かけた時、階下したから男の声で、

「中島さん。電話。」

「はい。お世話さま。」と返事をしたが、細帯もしめぬ寝衣姿ねまきすがたに女の立ちかねる様子を見て、男は襖ふすまに手をかけながら、

「おれが出てもいいか。」

「いいわ。懇意うちな家へは弟がいるといつてあるんだから。」

降りて行った男は、すぐさま立戻つて来て、「芳沢よしざわ旅館だとさ。急いで下さいとき。」

「そう。」と女は落ちてしている男の細帯を取つて締め、鏡台の上の石鹼せっけんとタオルとを持って階下したへ降りて行くと、男は床とこの間に据すえた茶棚からアルミの小鍋こなべを出し、廊下に置いてある牛乳壺びんを取つてわかし始めた。夜昼ともに電話がかかつて来て、飯を食う暇



のない時には女は牛乳か鶏卵で腹をこしらえて出掛けることにしているのである。牛乳がわきかけた時、女は髪を直した上に襟えりお白粉しろいまでつけ、鼻唄はなうたを唱うたいながら上つて来て鏡台の前に坐り、「あんた。おあがんなさい。昨夜おそく食べたから、わたし何もいらない。」

「そうか、お前の身体からだは全く不思議だな。よく食わずにいられますよ。」

「わたし子供の時から三度満足に御飯をたべた事は滅多めったにないわ。そのくせお酒も好きじゃなしお汁粉はいやだし……経済でいいじやないの。」

「全くだ。煙草たばこものまないし……」と言つたまま、男は鏡に映る

女の顔が化粧する手先の動くにつれて、たちま忽ち別の人のように若くなるのを眺めていた。眼の縁のふち小皺と雀斑そばかすとが白粉で塗りつぶされ、血色のよくない唇が紅で色どられると、くくり顎あごの円顔まるがおは、眼がぱっちりしているので、一層晴れやかに見えて来るばかりか、どうやら洋装をさせても似合いそうなモダンらしい顔立にも見られる。それに加えて肉付にくづきのしまった小づくりこの身体は背後うしろから見ると、なでがた撫肩のしなやかに、胸がくびれているだけ腰の下から立膝たてひざした腿もものあたりの肉付が一層目に立って年増盛としまぎかりの女の重くるしい誘惑を感じさせる。男はお千代が今年三十六になつてなおこのような強い魅惑を持っているのを確たしかめると、まだこの先四、五年稼いで行けない事はないと、何となく心丈夫な

気もする。それと共に人間もこうまで卑劣になったらもうおしま  
いだと、日頃ひごろは閑かんきやく 卻かへりしている慚愧ざんきと絶望ねんの念ねんが動き初めるに  
つれて、自分は一体どうしてここまで墮落する事ができたものか  
と、我ながら不思議な心持にもなつて来る。自分の事のみならず  
お千代の心境もまた同じように不思議に思われて、はつきり理解  
することが出来なくなる。——お千代はどういう心持でこの年月  
自分のような不甲斐ふがいない男と一緒に暮して来たのであろう。彼女  
自身も気のつかぬ中うちいつからという事もなく私娼ししょうの生活に馴なら  
されて耻はずべき事をも耻はじとは思わぬようになったものであろう。  
折々は反省して他の職業に転じようと思う事もあるにちがいない。  
しかしもともと小学校を出ただけの学歴では事務員や店員のよう

な就職口さえなかなかに見当らず、よしまた見当つたところで、一度秘密の商売を知つた身には安い給料がいかにも馬鹿らしく思われ、世間は広くてもその身に適する職業は、やはり馴れた賤業せんぎよの外にはないような心になるのであろう。それにつれて、女の身の何かにつけて心細い氣のする時、いかに不甲斐なくとも、誰か一人亭主と定めた男を持ち、生活の伴侶はんりよにして置きたいという心持にもなるのであろう——まずこんなように解釈するより外ほかにその道がない。

牛乳の煮立つのにえたに心づき男は小鍋を卸おろしてコップにうつすと、女は丁度化粧を終り紫地むらさきじに飛模様とびもようの一枚小袖いちまいこそでに着換えて縫ぬいのある名古屋帯なごやおびをしめ、梔子色くちなしいろの綾織あやおりきんしゃ金紗かさの羽織かざりを襲かさね

て白い肩掛かたかけに真赤まつかなハンドバックを持ち、もう一度顔を直すつもりで鏡の前に坐つた。

## 二

お千代の出で行つた後あと、重吉は飲み残りの牛乳と半熟の鶏卵に朝昼を兼ねた食事をすませ窓をあけて夜具を畳んでおくと、表二階を借りている伊東さんというカフェーじよきゆうの女給えりあかが襟垢おと白粉しろいとでべたべたになつた素裕すあわせの寐衣ねまきに羽織ひつを引かけ、廊下から内を覗のぞいて、

「中島さん……。あら、奥さんはもうお出掛けなの。」

「何か御用。」と中島は窓へ腰をかける。

「先ほどはすみません。おやすみのところを……。」と出入口の襖ふすまに身をよせ掛け、「封筒の上書うわがきをかいて下さいな。すみませんけれど、男の手でないといけないんだから。」

「はいはい御安おやすい御用……。彼氏かれしのところですか。」

「ううむ。」と子供のように首を振り、「パトロンの家よ。来月は十二月でしょう。今から攻め掛けてやらないと間に合わないから。強請ねだるのも容易じやないわよ。」

「何になつても苦勞いが入るもんですね。」

「女給生活、つくづくいやだわ。」と女は懐中から封筒を出して中島に渡し宛名番地を書いてもらいながら、「中島さん。わたし

も奥さんをお願いして派出婦会に這入りたいわ。ねえ、中島さん。わたしに出来るか知ら。奥さんのやつている接待婦ツていうのは普通の派出婦見たように御飯焚ごはんたきをしないでもいいんだわね。」

中島はお千代の事についてはあまり深く問われたくないので、唯領ただうなず付きながら四、五枚の封筒に同じ名宛を書きつづけている。

お千代は以前から男と相談して怪しげなその身の上を隠そうがために、或派出婦会の接待婦になっあるていて、電話で呼ばれる時は何処どこへでも会の名義で出張するのだといこしらえられている。時たま泊つて来る時には遠い別荘の宴会か何かへ雇われた事にするのである。中島は封筒を伊東さんに渡して、「接待婦なんて、あれア体ていのいい日雇ひやといの女中です。内うちのやつは年さえ若ければ女給さんにな

りたいツて、いつでも伊東さんの事を羨しがっているんですよ。」  
 「じゃア何になつてもそう面白いことはないのね。どうもお世話  
 さまでした。」

「お礼は後から頂戴ちようだいに行きますよ。」

「いらツしやいよ。ドーナツがあるわ。お茶を入れるから。」

女が立去ると、間まもなく中島は郵便局の通帳を懐中にして階下  
 へ降りた。階下は小売商店の立続いた芝桜しばさくら川がわ町の裏通うらどおり

に面して、間口三間まぐちさんげんほど明放あけはなちにした硝子店ガラスてんで、家の半分

は板硝子を置いた土間になっている。口髭くちひげを生した五十年配の

主人に出ツ齒はしごの女房、小僧代りに働いている十四、五の男の子の  
 三人暮らし。梯子段はしごだんの下の六畳で、丁度昼飯の茶ぶ台を囲んで



いる処を、中島は御免なさいと言いなから通りぬけて、台処の側そばの出入口から路地ろじづたいに、やがて表の通とおりを電車のある方へと歩いて行つた。お千代が貯金をしている郵便局は麻布六本木の阪さかした下にある谷町たにまちの局である。それはこの春桜川町へ引移るまで一年あまり、その近くの横町よこちょうに間借をしていたことがあつたからで。ところが或日あるひお千代が筋向すじむかいの格子戸造りの貸家に引越して来た主人らしい男と、横町を隔てて両方の二階から顔を見合せると、その男には既に二、三回、お千代は池の端いけはたの待合まちあいで出会つたことがあるといふので、もし近処のものにでも秘密の身の上をしやべられでもしたらと、万一の事を心配して、早速現在の貸間を捜さがして引移つたわけである。貯金した郵便局もその中うちに

近い処へ替えようと思ひながら、これはついそのままになつてゐる。

中島は部屋代の十二円に、電話の使用代として、その度の通話料の外にほか五円の礼金を出す約束なので、それを合せて十七円。女の着物の仕立代やら月末の諸払いを胸算用して五十円ばかり引出した。そしてすぐさま電車の停留場へ引返すと、いつもはあまり人のいない道端みちばたに、七、八人も人が立っていて電車はなかなか来そうもない。重吉はこの歳としつき月昼うちの中はめつたに表おもてどおり通へ出たことがないので、冬の日影も忽ち夏たちまのようにまぶしく思われ、にじゅうまわし一一重廻も着ずに出て来た身には吹きすさむ風の寒さ。急に腹が減つたような心持もする。それにまた、むかしの友達や何かに

は日頃ひごろから逢あいたくないと思つていたので、停留場の人立ひとたちが次第に多くなるのを見ると共に、こそこそ逃げるがように電信柱と街路樹との間を縫つて、次の停留場の方へと歩みを運ぶ。

溜池ためいけまで来た時、後うしろからやつと一輛いちりょう満員の車が走つて来

た。待ちあぐんだ人たちと、押合おしかいながら降りる人たちとの込合こみあう間を、漸ようやく抜け出した一人の女が、舗道ほどうに立っている中島の側を行過ぎようとして、その顔を見るや、「アラ中島さん。」

「玉ちゃん。どうしたえ。」と中島は男の知人しりびとでないところから案外落ちついた調子でその様子を見た。年は二十七、八。既成品らしい紫地のコートにありふれた毛織の肩掛。両ぐりの下駄げたを  
はいて日傘ひがさを提さげている。

「千代子さん。おかわり変もなくつて。」

「ええ。無事です。」

「一度お伺いしなくつちやわるいと思つていたんですけど、ついおたが処がわからなかつたもんで……。」と女はあたりを見廻し停留場にも人影がなく通と過りする円えんタクもちよつと途と絶だえているのを幸い、「このへん辺にお住すまいな。」

「いえ、桜川町……十八番地。太田ツていう硝子屋の二階だ。虎とらの門もんからわけはないから、何なら寄つておいでなさい。」

「お邪魔してもよければ……実はわたし貸間をさがしているのよ。今世せ田たケ谷やにいるんですけど、こつちへ出てくるのが大変だから

。」

二人は話をしながらいつか溜池の裏通を歩いている。

「その後ごまるで影形も見せないから、お玉さんは東京にいないんだろうツて、家うちのやつもそう言っていたよ。じゃア、すっかり足を洗ったという訳わけでもないんだね。」

「洗いかけたことは掛けたのよ。まア片足ぐらい洗ったんだわね。ほほほほほ。」

「やっぱり先生と一緒にか。」

「いいえ、別れたの。この夏やつと話をつけて別れたのよ。それにはいろいろ訳もあるのよ。去年の暮だったわねえ、高輪たかなわ倶楽部クラブのおばさんが拳あげられたでしょう。わたしもその時一緒にやられたのよ。それから一月ばかりぶらぶらしていたわ。だけれど家の

先生は相変らずだし、どうにも仕様がなから、ついこの間まで渋谷しぶやの小さいカフェーに働いていたのよ。思ったよりは忙しい店いそがなんだけれど、チップだけじゃ二人暮して行けるはずがないじゃないの。何も彼も承知しているくせに、内の先生うちとききたら相変らず御存じごぞんの通りなんだから。わたしもあんまりだと思つて、持つているものは洗いざらい、お金も百円都合して或人あるひとを仲に入れてきつぱり話をつけてもらったのよ。だからこれからは一人でかせぐわ。その方がどんなに気楽だか知れやしない。」

「そうか。しかしよく思いきれたな。その中うちまた焼棒杭やけぼつくいじやないのか。」

「よしてよ。なんぼわたしが馬鹿だつて、そうそう男の喰くいもの

に……。」「と女は言いかけて、中島とお千代との関係を思合せ俄にわかに語調ちようしを替え、「ねえ、そうでしょう。男の人が理解と同情を持つていてくれれば……。中島さんのようにわかつていてくれれば、それア女ですもの、男のためならどんな事でもするわよ。喜んでするわよ。」

「しかし、しまいには愛想あいそが尽きるだろう。あんまり男に意久地いくじがなさすぎると……。ねえ、玉ちゃん。あの時分、あんたが家にいる時分、何かそんな話をした事はなかったかね。内うちのお千代がさ。内のやつは一体何とっておれと一緒に暮しているんだらう。考えると、時々不思議な気がするよ。」

「あら。中なアさん、何を言っているのよ。今時急にそんな事……

。  
「

「話が出たからそう言うのさ。別に心配しているわけじゃない。しかし女の心持は女に聞かなくツちや、男にはわかったようでも分らないところがある……。」

「それアそうかも知れないわ。女の方でも同じよ。男の心持は分ったようで、やっぱり分らないわ。ねえ、中アさん。家の彼氏はどうして中アさんのようにさばけてくれなかつたんだろう。」

「もうそろそろ未練みれんばなしか。」

「いいえ。それは大丈夫。だから今度の彼氏は中アさん見たような趣味の人を見付けるわ。」

「何だ。おれ見たような趣味の人ツて。」



「わたし、先に千代子さんから聞いたわ。中島さんはこういう商売が好きなんだって。千代子さんに勧めてやらせたんだって。」

「千代子がそんな事を言ってたか。はははは。しかしこればっかりはいくら勧めたって、女の方でも地体自分でやる気がなければ出来るもんじゃアない。まア二人とも同じような人間がうまく一緒になったんだね。それだから無事にやって行けるんだ。それにはいろいろな事情や歴史がある……。」

中島は問われるままに初めは冗談半分口から出まかせな事を言っていたが、する中、いつかしみりした心持になって来て、平素誰にも話をする事の出来ない過去半生の来歴を心の行くかぎり話して見たくてならないような気がし出した。

「ねえ、玉ちゃん。まだ学生の時分だった。僕がね……。」「と言出したが、その時お玉は横町よこちょうのとある家の出窓に貸間の札の出してあるのを見付けて、

「ちよいと、わたし聞いて見るわ。」と突然立止たちどまった。中島は話の腰を折られ、夢から覚めたような眼付めつきをして、お玉が向の家むかいの格子戸をあける後うしろすがた姿をぼんやり眺めていた。

## 三

中島はその名を重吉というのである。重吉が私立あの或大学を出たのは大正六、七年の頃ころで、日本の商工界は欧おうしゅう洲戦争のため

に最も景氣の好い時代であつた。重吉はわけなく就職口を見付け、  
ある或商会から広告代りに発行する雑誌の編輯へんしゅうがかり係になつたが、  
 仕事には敏活びんかつでなくせに誠実でもなく、出勤時間にもおくれ  
 がちといふので、一年過ると間まもなく解雇となつた。しかしその  
 頃には差さしあた当り生活には困らない理由があつたので、玉突たまつきや釣つり  
 などに退屈たいくつな日を送る傍かたわら、小説をもかいて見た事があつたが、も  
 ともと専門の文学者になろうといふほどの熱心もまた自信もなか  
 ったので、或新聞社の懸賞募集小説に依じて落選したのを名残なごり  
 に、この道楽も忘れたように止よしてしまつた。そうになると、一時  
 は丁寧ていねいに浄書じやうしょまでした原稿の五、六篇もいつとはなく紙屑かみくずにし  
 てしまつたが、その中で、自叙伝めいた一篇だけは、さすがに捨

てがたい心持がしたと見えて、今もつて大切に押入の中の古革ふるかば包んにしまつてある。重吉はお千代が外へ泊つて歸つて来ない晩など、折々この旧作を取出しては読返よみかえして見るのである。

この小説は重吉が学校を卒業する前後五、六年の間、十以上も年のちがつた未亡人と同棲どうせいしていた時の事を、殆ど事実ほんそのまま書きつらねたものであつた。

未亡人は 麴町こうじまち 平川町ひらかわちようへん 辺に玉突場たまつきばを開いていた。そし

て玉突に来る学生四、五人を引きつれ、活動写真を見に行つたり銀座通や浅草公園あさくさを歩いたりする。重吉も欠かさずお供にさそわれる学生の中の一人であつたが、毎年八月中未亡人が店を休んで鎌倉へ避暑に行く。その後を追いかけて行つた時、ここに忽ちたちま

情交が結ばれ、涼しくなつて東京に立戻ると間もなく女は玉突場を売払う、重吉は下宿を引上げる。そして二人は一軒家を借りた。丁度その頃、重吉は国元からこれまでのように学費を送ることのできなくなつた事情を通知せられたが、未亡人と同棲しているために重吉は差さ問しつなく学校を卒業したのみならず、その後職を失つても平気で遊んでいることが出来た。

重吉の家は新潟の旅館で、両親は早く死し兄が家督かどくを取つていたが、経費ばかりかかつて借財も年々嵩かさむばかりなので、いよいよ財産整理をした上家族をつれて朝鮮の京けい城じょうへ移住し運だめしに一奮発するといふのである。重吉は学生の身でも立派に自活して行く道があるから心配するには及ばないと返事をして、未亡

人の家の厄介になつていた。

卒業後、商會に通勤していた時分である。いつも重吉の歸りを待つていた未亡人が、或日家を留守にしたまま、夜も十二時近くなつて、しかも酒臭い息をして歸つて来たことがあつた。重吉は口惜くやしさのあまり涙ぐんだ声で責め詰なると、女は子供をなだめるような調子で、

「重ちゃん。御免なさい。重ちゃんはお酒が飲めないから、わたし今日はお酒飲みのお友達とちよつと御飯をたべに行つたのよ。おそくなつたのはわたしが悪かつたんだから、ほんとにあやまるわ。重ちゃん、大丈夫よ。決して浮気なんぞしやしないから。」

そして女は重吉がいかにも疑ぐろうとしても疑ぐることの出来な

くなるような情熱を見せて申もうしわけ訳わけの代りにした。

半はんとし歳とちかくたつて、或日の朝重吉はいつものように寐坊ねぼうな女

を二階へ置いたまま、事務所への出がけ、独り上あがりがまちがまちで靴をは

いていると、その鼻先へ郵便脚きやくふ夫が雑誌のような印刷物二、三

冊を投げ込んで行つたので、そのまま手にして電車に乗つてから、

重吉は出版物の帯封を破りかけた時、重ねた郵便物の間に封書が

一通はさまつていたのに心づいた。宛名は種子たねこという未亡人の名

で、差出人も女名前であつたが、重吉はその瞬間一種の暗示を感

じたまま、事務所へ往ゆき着くが否や、巧みに封じ目の糊のりをはがし

て中の手紙を見た。外そと封ふうの書体とはまるで異つた男の手しゅせき蹟せきで、

一語一句、いずれも重吉の心を煮にえ返かえらせるような文字ばかり並

べてある中に、「ではまたこの次の水曜日を楽しみに。」「あなたもどうかその日をお忘れなさらないように。」「いつもの時間に。」というような語が殊ことに鋭く男の胸を刺した。

「この次の水曜日」は暦を見れば分るが、「いつもの時間に。」とは何時のことであろう。重吉は一策を思いついた。未亡人種子の行動を探るには、その跡あとをつけたり何かするよりは、專業の秘密探偵に依頼してその身元から調べ上げてもらうのが一番捷ちかみち徑ぢであろう。そう決心して重吉はその月の給料の遣つかい残りを傾けて探偵社への報ほう酬しゅうに当てた。

種子は未亡人ではなかつた。十年ほど前、背任罪で入獄中縊いし死しした実業家某めがけというものの妾めかけで、その前身はかつてその実業家の



家に入りにしていた家庭教師であった。現在種子の名義になつて  
いる動産並ならびに不動産は犯人が検挙せられる以前合法的に隠いんとく匿かくし  
た私財の一部であるのかも知れない。また種子が現在関係してい  
る男の中で、探偵社の調査したものは、筑前琵琶ちくぜんびわの師匠何某なにがし、  
新派俳優の何某、日本画家何某の三人であるという。

しかしほどなく重吉は会社から解雇されて、一年ちかくたつた  
時、種子自身の口から探偵社の調査報告書よりもっと委くわしい事  
情をば、包むところなく打明けられる機会に出遇であつた。種子はそ  
の身の不しだらを永く隠しおおせるものでないと思つたのか、あ  
るいはまた男の心を引いて見るためか、大胆にもこんな事を語つ  
た。

「重ちゃん。わたしは十九の時から三十まで十何年、いやでいやでたまらない人の玩弄物おもちゃになつていたのよ。よく辛抱しんぼうしたでしよう。自分ながら感心だと思ふ位なのよ。その時分、今に自由な身になったらその時は思ふ存分な事をして、若い時の取返しをしようと思つて思つていたのよ。だから、わたしの事をかわいそうだと思つて同情してくれるのなら、少しくらい遊んで歩いててもそれは大目に見て頂戴ちやうだい。何ぼわたしが滅茶めっちゃだつて、今更重ちゃんをそつちのけにして外の男と一緒にならうなんてそんな事は夢にも考えたことはないわ。浮気は浮気で、本心から迷うなんてことは決してないわ。その証拠しやうこには彼の人も、それから彼の人も、みんな奥さんのある人じゃないの。どうの、こうのと後あとが面倒に

なるような人とは、重ちゃんが家にいるようになってから、一度だつて遊び歩いたことはないでしょう。重ちゃんさえ安心してくれれば、わたしはどんな証文しょうもんでも書いて見せるわ。」

重吉は種子の語つたことを冷静に考えて見た時、始はじめて自分は淫い蕩んとうな妾めかけあが上りの女に金で買われている男妾も同様なものである事に心づいた。女の言う所を言換いいかえて見れば、お前さんは学生上りで悪気がないから、それでわたしは安心して同棲をしている。他の男はお前さんとはちがつて世馴よなれているから、わたしの財産に目をつけないとも限らない。それ故家ゆえへは入れずに、距離へだてを置いて、外で逢あっているのだ。何も彼かも承知でやっているのだから、お前さんは別に心配せずにおとなしくしていればいいのだ。とい

う意味になる。重吉はかつて覚えたことのない侮辱ぶじよくを感じて決然として女の家を出ようと思ひながら、また静しずかにその身を省かえりみると、勤先をしくじってから早くも一年ぢかく、怠氣癖なまげぐせのついてしまった身には俄にわかに駈かけ歩いて職を求めぬ氣力が薄くなっている。元の家へ還かえろうにもその家はとうに潰つぶれてしまった。重吉は始めて身にしみじみ自活の道を求める事のいかに困難であるかを知ると共に、屈辱を忍んで現在の境遇あまんに甘じてさえいれば、金と女とは不自由せずにいられるのだ、という事をもはつきりと意識した。

重吉はこのまま種子の世話になつていようと思えば、まず何より先に男の持つてゐる廉耻れんちの心を根こそぎ取り棄すててしまわなけ

ればならない。

世間には立身栄達の道を求めるために富豪の養子になつた  
 権家の婿になつたりするものがいくらもある。現在世に重ぜら  
 れている知名の人たちの中にもこの例は珍しくない。それに比較  
 すれば重吉はさほどその身を耻るにも当るまい。女の厄介になつ  
 て、のらくらしている位の事は役人が賄賂を取つて贅沢をする  
 のに比べれば何でもない話である。重吉は人の噂、世間の出来事、  
 日常見聞する事にその例を取つて、努めて良心を麻痺させ廉耻の  
 心を押えるような方法を考えた。

重吉が自叙伝めいた小説をかいて見たのは、これらの煩悶を  
 述べて、己の行為に対する弁疏にしたものであつた。題をつける

のに苦しんだものと見えて、本文の始はじめに書かれた文字は幾度か塗ぬ消りけされて読めないままに残されている。

#### 四

種子はその後も相変わらず、一ト月の中に二、三回はきまつて午後外出すると、そのまま夜もおそくならなければ帰つて来ないことがあつた。月初めには以前世話になつて財産まで分けてもらった檀那だんなのお墓参り、月の終には現金と証券とを預けた銀行への用事、その他は百貨店へ買物に行くというような事で。その頃はちよつとした処へ行くにも賃銀五円を取つた自動車を呼寄せ門かどぐち口

から乗つて出る。しかし重吉は既に馴なれて初めほどにはやきもきしないようになっていた。事実種子の行動はその言う通り黙許して置いても重吉の生涯には何の利害もないことが月日の過ぎるにつれて次第に明瞭になった。そのみならず、重吉は種子が知人からの紹介で、或土地会社あるの宣伝係に雇われ、僅わずかばかりでも再び自力で給料を取る身となつたので、以前にくらべるとよほど落ちついた心持でいられるようにもなつていた。

二人の生活は、最初家を借りた赤坂あかさかから芝公園しばこうえんへ引越した後、更に移つて東中野ひがしなかのへ落ちついた頃には、何も知らない人の目には羨うらやましいほど平和に幸福に見られるようになっていた。

震災の年、種子は四十五、重吉は丁度三十三になつた。年々若

づくりになつて行く種子と、二十代から白髪しろがのあつた色の黒い小  
おとこ男の重吉とは、二人並んでいても年のちがいが以前ほどには目  
 に立たぬようになつて来た。女の方は白粉おしろいや頬紅ほおべにで化粧を凝こら  
 し、髪はその頃流行の耳かくしに結ゆい、飛模とびもよう様の着物に錦欄きんらん  
 のようなでこでこな刺繡ししゅうの半襟はんえりをかけ甲高かんだかな調子で笑つた  
 りしている側そばに、じみな蚊か紺がすりの大島紬おおしまつむぎに同じ羽織かきを襲かねた  
 重吉が仔細しさいらしく咳嗽せきばら払いでもして、そろそろ禿はげ上りかけた額ひたい  
 でも撫なでている様子を見ると、案外真面目まじめな夫婦らしく、十二、  
 三も年のちがう仲だと思われぬ。

ついたち九月の朔日に地震の起つた時、重吉は会社の客を案内して下  
もめぐろ目黒の分譲地を歩き回つていた最中さいちゆうだったので何の事もな



かったが、種子は白木屋しろぎやで買物をしていたので、狼狽うろたえて外へ逃出し、群集に押しもまれながら駈かけ歩いている中、いつか足袋たびはだしになったため踏ふ抜きみぬきをして、その日の暮れ近く人に扶たすけられてやっと家へ帰つて来た。

足の疵きずはやがて痊いえたが、その年の冬風かぜ邪ぜから引きつづいて腹膜炎くまくえんに罹かかり、赤十字病院に入ると間もなく危篤きとくに陥おつた。医者

の注意と患者の希望とによつて、これまで重吉の一度も会つたことのない親戚しんせきが二人、その一人は水戸から、他の一人は仙台から病院へ呼寄せられた。その翌日の夜種子が息を引取ると、親戚二人の間には忽たちまち種子の遺産の処分について議論が持出された。水戸から出て来たのは中学校の教員で種子の兄だという。仙台から

のはその地の弁護士で叔父だという。家中をさがしても故人の遺書が見当たらないので、その遺産は二人の親戚が分配してその残りを重吉に贈ることに議決された。即ち銀行に預けてある現金五千円ばかりと、家具衣類などである。重吉は抗議したが、弁護士の叔父は法律上重吉には異議を言う権利がない事を説き、漢文の教師で柔道は三段だという水戸の兄は重吉が種子の家に入り込んだ来歴を詰問して、その答弁の如何いかんによつては道德上の制裁をも加えまじき勢いきおいを示した。重吉はしぶしぶ二人の為なすがままに任まかすより仕様がなかつた。かつて学生のころ、重吉は水戸出身の同級生と争つて、白鞆しらぎやのヒ首あいくちでおどかさされた事があつてから、非常に水戸の人を恐れているのである。

葬式が済んで、親戚の二人が何やら意気揚々として立去ると、その後に残された重吉は唯一人、長い長い夢から覚めたような心持で、何をどうしていいのやら、物が手につかない。

「檀だんなさま那樣御飯ができましたが。」と言う声に、びっくりしてあたりを見廻すと、日はいつか暮れかけたと見え、座敷の中は薄暗くなつて、風が淋さびし気に庭の木を動うごしている。立つて電燈を点じる足元へ茶ぶ台を持ち運ぶ女の顔を見ると、それは不ふ断だん使しつていた小女こおんなではなくて、通夜つやの前日手不足のため臨時に雇入れた派出婦であるのに気がついた。

年はちよつと見たところ二十五、六かとも思われる。別にいい女ではないが、円まる顔がおの非常に色の白いことと、眼のぱっちりし

て、目に立つほど睫毛まつげの濃く長いことが、全体の顔立を生いき々いきと引立たせている。声柄こえがらも十六、七の娘のような、何処どことなくあどけない事をも、重吉はこの時始めて心づいた。

「御給仕おきゆうじをしてもらおうかね。」と言つて茶碗ちやわんを出すと、派出婦は別に気まりのわるい様子もせず、「お盆を忘れましたから御免ごめん下さい。」と飯をよそいながら、「召上れないかも知れません。何をこしらえていいか分りませんでしたから。」

障子の外では小女が縁側の雨戸を繰りはじめた。

「いや結構だ。うまいよ。」と重吉は落し玉子の吸物を一息ひといきに半分ほど飲み干した。葬式の前後三、四日の間ゆっくり飯を食う暇もなかったので、今になってから一時に空腹を覚え初めて、実

は物の味もよくは分らないのであつた。派出婦は褒められていよいよ嬉しうれそうに、

「沢山召上つて置かないといけません。後で一度にお疲労つかれが出来ますから。」

「お千代さんだツけね、名前は。お千代さんも御おともら弔いをした経験があるらしいね。」

「いいえ。自分の家では御ごさいい在ませんけれど、方々へ出張いたしましたから。」

「長くやっているのかね。」

「まだいくらにもなりません。地震前は前からなんで御ご在ますけれど、姑しぼらく休んで、先月からまた出始めましたんです。」

「震災には無事だったのかね。父さんやお母さんは……。」

「ええ。家は市外の……田舎ですから。」

「まだ結婚したことはないのか。どうもありそうに見えるよ。」

「そう見えますか。ほほほほ。」

「結婚してもうまく行かなかったのかね。」

「ええ、もう懲り懲りしましたわ。それよりか人様のお内うちに働い

ている方が気楽で能よう御在ます。」

「しかしそういつまで人の家に働いていたって仕様がないじゃないかな  
いか。まだそう悲観する年でもないし、捜さがせばいくらでもあるも  
のだよ。」

「そう仰おっしゃ有やいますけど、縁というものはあるようでないもんで

すわ。」

「ないようであるものさ。考えよう一ツだよ。」

「では、いいところが御在ましたら、御世話を願います。」

「お千代さん、あなた、いくつです。二十五か六くらいかね。」

「そう見て下されば結構です。実はもう八なんで御在ます。」

愛嬌あいきよう 好く笑いながら派出婦せんとは膳ぜんを引いた後あと、すぐ飯櫃おほちを取

りに来てまた姑はかく話をして勝手へと立去った。

重吉は寐ねるより外ほかに何もする事がない。心の中では、死んだ種子の衣類や貴金属品の仕末をつけると共に、この家も早く畳んで、これから先は自分の給料だけで暮らせるような処置を取らなければならぬと、考えながら、何一ツ手をつける気が出ない。火鉢

の火の灰になつたのもそのままに重吉は懐手ふところしてぼんやり壁の上の影法師を眺めている。やがて小女が番茶を入れて持つて来た。

「お千代さんはどうした。もう寐ねてもいいと言つておくれ。」

「はい。」と小女が立つて行くと間まもなく派出婦のお千代が湯婆ゆた子んぼを持つて襖ふすまを明け、

「あら。お蒲団ふとんが引いてあると思つたら。どうも済みません。」

「旦那様だんなさまが何とも仰おっしゃ有あらないんだもの。」と小女は始めて気

がつくと共に顔をふくらし行つてしまつた。お千代は押入から

夜具を取り下しおろ、シーツを敷き延べてから、枕まくらを取出そうとして、

二ツとも同じような坊主枕の、いずれが男のものだか分らぬとこ



ろから、

「旦那様、これはどちらが……。」「と言いかけ、重吉が黙っているのを見て、急に気がつき、わるい事を言つたような気の毒な心持になって、すこし顔さえ赤くしながら、お千代は男のだから女のだか判明しない枕を取つてシーツの上に置こうと、りようひざ両膝を畳の上につく。重吉はそれを待つていたように突然背後から抱きついた。

「いけません、あなた。」と案外低い声で言いながらお千代は重吉の手を振りほどこうと身をもがき、「およし遊ばせ。女中さんが来ます……。」「

重吉は小女のことを言われて始めて気がついたらしく抱きすく

めた手を緩めてお千代の顔を見た。お千代は怒って何か言うかあるいは畳を蹴つて逃げ去るかと思いの外、「いけませんよ。おからかい遊ばしちやア。こんどなされると大きな声を立てますから。」と言いながら重吉の寝衣らしいものを押入から取出して枕元に置き、夜具の裾へ廻つて湯婆子を入れる。この様子をじつと見て、重吉はお千代が派出婦にしてはすこし容貌が好すぎるので、度々こんな事には遇いつけているのだから。それで案外落ちついていられるだろう。ひよつとすると、後で面倒な事を言出さないと限らぬが、そうなればその時にはその時のしようがあると思います心が乱れて来る。

「お休み遊ばせ。」畳に手をついて立ちかけるのを、重吉はあわ

てて呼止めた。

「もう何もしない。もうすこし其処そこにいてくれよ。なんだか寂しくつてしようがないんだ。」

## 五

お千代が語る身の上ばなしをきくと、この女は中川の堤に沿うた西船堀にしふなぼり在ざいの船宿ふなやどの娘であつた。都会にあこがれて、両親の言うことをきかず、東京市内の知人しりびとをたよつて家を飛出とびだし、高輪たかなわの或屋敷あるへ女中奉公に住込すみこんだ。それは年号の変る年の春頃ごろであつた。その年夏のさかりに毎夜丸まるの内の芝原しばはらへいろいろ

異様な風をした人が集つて来て、加持かじき祈とうをするのを、市中の者がぞろぞろ見物に出かけた。お千代も度々主家の書生や車夫などと夜がふけてからそつと屋敷を抜ぬけだして真ま暗くらな丸の内へ出掛けたが、或夜巡査に咎とがめられ、屋敷から親元へ送り返された。その時お千代は既に妊にん娠しんしていた。生れたのは女の子で、お千代の老母が養育するということになったので、せめてその費用なりとも稼かせぎたいと、お千代は再び東京へ女中奉公に出た。三、四年の後相応の人が媒介をしてくれるがまま或雜貨商の家へ嫁に行くと、ほどなく田舎の母親が病死したので、良人おととに事情を打明けて子供を引取った。しかし無事に暮したのはわずか一年ばかりで、良人の両親や兄弟までが地方から出て来て同居するようになってから、

家内には紛々ごたごたが絶えず、暮し向も店をしまわなければならぬまでに窮迫して来た。お千代は親の家むきにいた時から手の汚れるような荒い仕事が嫌いであつたのと、また最初からあまり気の進まなかつた縁だつたので、話合いで夫婦別れをして、子供は幸いと近処の人に懇望せられるまま養女にやり、身一ツになつた気まぐれに、またまた屋敷奉公に出歩いた後、派出婦になつて見たのだという事であつた。

次の日の朝、重吉は小女こおんなを使に出した後あと、死んだ種子の衣類を入れた箆筒たんすの扉や抽斗ひきだしをお千代にあけさせた。お千代は樟しょう腦のうの匂においを心持よさそうに吸込すいこみながら、抽斗を引きあける度たびに、まアまアと驚嘆の声を発し、

「あなた。こんな立派なお召物、みんなわたくしのものにしてもいいと仰おっしゃ有るの。エ、あなた。うそでしょう。」

「うそなものか。お前がいらないと言え、もともと売ろうと思つていたんだから、処分してしまうよ。用筆筒の中に指環や何かがあるんだがね。それは親類のものに頒わけてやる事になっているんだ。見るだけなら見てもかまわない。」

「ええ。どうか、拝見さして下さい。ほんとお召物だけでもゆつくり拝見していたら一日かかりますわねエ。」

お千代はもう逆上のぼせたように顔ばかりか眼の中までを赤くさせ、函はこの中から取出す指環ゆびわや腕時計を、はめて見たり、抜いて見たりして、そのたびたびに深い吐息といきをついている。

「形見分けをするのは急がないでもいいんだからね。まだ二、三日、なくしさえしなければは餓めていてもかまわない。」

「ねえ。あなた。震災前だったらこの指環をはめて、三越の中でも歩いて見たいんだけど、今はどこも行く処がありません。」

「ははははは。」と重吉は思わず笑ったが、しかしお千代があまりにも嬉しがる様子に、女というものはこんなものか知らと、物哀れなような気の毒なような変な心持がした。

昼飯をすますと直すぐさま様お千代は派出婦会との契約を断るために出て行く。重吉は種子あかりが生きている時分に雇やとい入れた小女こおんなに暇をやる。そして灯あかりのつく頃帰つて来たお千代と一緒に、手を引き合あわぬばかりにして近せんとう処の銭湯に行つた。

震災後土地家屋の周旋業は一時非常に成績が好かつたので、土地会社へ勤めていた重吉もこれまでにない賞与金を貰つたくらいで、丁度歌舞伎座が新に建直された時、重吉は種子の衣類に身を飾つたお千代を連れて見物に行く。暑中休暇には二人連れで三日ばかり箱根へ出掛ける。郊外の家はその前に畳んで牛込矢来町に移つていたので、每晚手をひきつれて神楽阪の夜店を見歩く。二人の新婚生活は幸福であつた。

しかしこの幸福は世間一般が不景気になるに従つて追々に破壊せられるようになった。再び年号が改つたその翌年の春、市中の銀行が殆ど軒残らず戸を閉めたことがあつた。重吉が種子の遺産として譲受けた五千円の貯金はその時なくなつてしまう。



つづいて勤つとめさき先の会社が突然解散せられる。種子が形見の貴金  
 属類は内ないない々々でどうの昔売り飛とばされた後である。

重吉は突然この窮境に陥り、内心途法に暮れながらも、お千代  
 に対しては以前の会社がほどなく財産整理をして再興するはずだ  
 から暫しばらくの間辛抱してくれるようにと言いいこしら拵こしらえて空しく日を送  
 っていた。毎月晦日みそかぢかくなると、お千代は一時自分のものにし  
 て喜んでいた種子の衣類を一ひと襲かさね々々ひとかさね質屋に持つて行かなく  
 てはならぬようになった。

「あなた。どこか間借りをしたらどうでしょう。家を持つている  
 よりかよッぽど経済だと思えます。」と或日お千代の方から相談  
 をしかけた。重吉は内心それを待つていたのであるが、「うむ。

「そうか。」とは言わずに、「会社の方もその中うちにはどうかなるだろう。実は昨日も重役の家へ呼ばれて行ったのだが……。」といつものように落ちついた風を見せていた。

「元のようになつたら、その時また家を借りればいいじゃありませんか、別に見得みえを張らないでもいいんですから。それに、あなた。着物ももう時節のものばかりで、外ほかには何にもありません。」

「そうか。それは気がつかなかった。実にすまない事をした。」と重吉は始めて知つたような顔をして「これからは己おれのものを持つて行こう。お前の物はよしたがいい。」

「でも、男は世間の体裁がありますから。こうなればわたしは何を着ていたって構いません。」とお千代は涙声になる。

「実にすまない。」と重吉も眼をぱちぱちさせながらそれとなく女の様子を窺うかがった。重吉は始めから質しちぐさ草の乏しくなった時、お千代が何を言出すか、それによつて最後の決心をしなければならぬと思つていたのである。最後の決心というのは、お千代が生活のために店員になろうとも、あるいは女給になろうとも、あるいは再び派出婦になろうとも、夫婦関係を絶たずにつきまとつていなければならぬという事である。

まだ学生であつた頃——今日のようにカフェーやダンス場などの盛にならなかつた頃から、重吉は女の歡心を得るためにはどんな屈辱をも忍び得られる男である事を自覺していた。贅ぜいたく沢たくな玉たま突まつ場ぎばの女主人に取入つて、七、八年の間姪いんとう蕩とうな生活をつづけ

ている中、重吉は女から受ける屈辱に対して反動的な快樂をも感じるようになった。そして女というものは、横暴残忍な行動をその欲するがままにさせて置く男を一番よく愛する。女は男を軽<sup>かろん</sup>じて尻に敷くか、そうでなければ反対に男から撲<sup>なぐ</sup>られなければ満足しない。極端にこのいづれかを望んで止<sup>や</sup>まないものだという事でも、重吉はその経験からこれを確めていた。

お千代はどうするだろう。お千代は四年あまり自分と同<sup>どうせい</sup>棲して年はもう三十を越している。四年の間女の望むもので何一ツ与えられないものはなかった。その恩義もあれば、また未練もあるはずだ。年も三十を越しているから、今更自分を振り捨てて行く<sup>きづかい</sup>氣遣はまずない。それは衣類を質<sup>しちいれ</sup>入しながら半年あまり離れ

ずにいるのを見てたしかも確である。重吉の胸の中には早くから或ある計画がなされていた。

重吉は三、四年この方カフエーの女給がすくなからぬ収益を得ている事を知つて、お千代を女給にしたいと思つていた。しかし自分の口から先にその事を言出すのは、女から薄情だと思われるおそ虞れがある。女の口から言わせるように為しむ向けて、そして自分が止めるのを聴かず、女が敢あえてするようになることを望んでいた。

重吉はお千代が家をたたんで間借りをしようと言出したので、計画の半は既なかばに成じょうじゆ就したような気がした。飯田町いいだまちへん辺の素人しも屋たやの二階へ引移つた後、重吉は家にばかり一緒にいては、女に思案の余暇を与える時がない。女がどうかいう場合、男にも優まさつた

決心とその実行とを敢てする<sup>あえ</sup>ことがあるのは、思慮分別の結果ではなくして、大抵は一時の発作による。この発作は無<sup>ぶりよう</sup>聊<sup>せきば</sup>と寂<sup>せきば</sup>寞<sup>く</sup>とに苦しむ結果による事が多いと考えたので、時を定めず外へ出るようにした。勿<sup>もちろん</sup>論、これは去年破産した土地会社で知合になつた人たちをたずね歩いて、就職口をたのむためでもあつた。その後保険会社の勧誘員になつてゐる五十年輩の男を訪問した時、その男は雑談の末にこんな事を言つた。

「君は僕なんぞとちがつて、まだいいさ。君の細君は若いし美人だからな。まさかの時にはどうかしてくれらアね。」

「こう落ちぶれたら、見<sup>みえ</sup>得<sup>へちま</sup>も糸瓜もかまつちやアいられないからね。実は女給か何かにしたと思つてゐるんだがね。僕から言出

しちやチトまずいからな。」と重吉は答えた。

「何がまずいものか。世間はいろいろだよ。極端な例をいうと、女房に檀那取りだんなとをさせている男さえあるからな。土地会社の時分じぶん外交員に野島という丈せいの高い出歯でっばの男がいたろう。あの男の細君は或株屋の店の事務員になっていたんだが、その店の主人と関係をつけたんだ。それを野島は見えない振りをしていたおかげで、とうとう人形町にんぎょうちようにカフェーを出さしてもらった。」

「そうか。ちつとも知らなかった。よくある話だが、一体そういう事はどうして起るものだろう。最初男が暗あんに教唆きょうさするのか、それとも女が勝手にやり出してから、男の方がそれを黙許するんだらうか。」

「外の事とちがうからな。教おそわつたり勧められたりしたんじや、巧うまく行かねえだろう。女給でも芸者でも人に勧められてなったものは適材適処とはいえないからな。親兄弟の反対するのも聴かずになったような奴やつでなくつちや腕は上るまいて。」

重吉は他の日にまた別の人を訪問すると、その人は重吉に向つて、「中島君、安い月給取りの口は別として、金持の未亡人でも捜さがしたら、どうだ。君は女に好かれる性質たちだから、きっと成功するぜ。」と言つた。

## 六



角かどの八百屋やおやで野菜を買って帰ろうとした時、お千代はその名を呼ばれても誰であつたか思い出せなかつたくらい、久しく見かけない人に出逢であつた。震災前派出婦として働きに行つた先さきの主人である事だけは忘れなかつたがその名前は思い出せない。

「あなた。よくわたしの名を覚えておいででしたね。」

男はあたりの人通りに気をつけながら、「またしばらく来てもらいたいんですがね。電話は何番です。」

「ただ今派出婦会の方は休んでおります。親類に病人があるので、手つだいに来ております。」とお千代は言いまぎらした。以前この男の家へ派出婦会から出張した時お千代は無理やりに口説くどき落されて、一ヶ月ばかりいた事がある。そして規定の日当の外に二、

三拾円貰もらった。

「家は以前の所です。小日向水道町……覚えていてでしょう。一日でも二日でも能御よござんす。暇を見てちよつと来て下さい。失礼だが、これはその時の車代に。」と言つて、男は無理やりよこちよに五拾銀貨二、三枚をお千代に握らせ、振返りながら向側の横町へ曲つた。

お千代はこの間から、質しちに入っている衣類の中で、どうしても流してしまいたくないと思うものがあるので、せめて利子の幾分でも入れて置きたいと思案に暮れていた。その矢先、偶然おもいが思おもい掛けない人に呼留よびとめられて、車賃まで渡されて見ると、訪ねて行きさえすれば少し位の都合はしてもらえないはずはないという事

を考えない訳には行かなかつた。丁度その日重吉は新聞に出ていた外交員募集の広告を見て外出したまま夕飯時を過ぎてても帰つて来なかつたので、お千代は膳拵えだけをして階下の人に伝言を頼み、ふらふらと小日向水道町へ出かけた。帰つて来たのは夜も十時過ぎであつたが、重吉の帰りはそれよりなお半時間も遅かつたので、この晩のことはそれなり秘密に葬られてしまつた。

或日お千代は重吉の出て行つた後、二階の窓へ寝衣や何かを干している、往來から女の声で、「奥さん。中島さんの奥さん。」と呼ぶものがある。この貸間に引移つてから、間もなく銭湯の中で向から話をしかけるまま心安くなつた五十前後の未亡人らしい女である。湯の帰り、道づれになると、「お茶でも一つ

上つていらつしやい。」と言う。「何か急場の事で御金の御入おいりよ用うがありましたら、証しょうもん文も何もなしで、御用立てをしますから。」と言つたこともある。お千代は良人おととにも話をした上金を借りたとは思ひながら言出しかねてそのままにしていたのである。此方こちらから出掛けた事もなければ、向むこうから尋ねて来たこともない。

この老婆ろうばは以前は大塚おおつかの坂下町さかしたまち辺、その前は根岸ねぎし、また高輪たかなわあたりで、度々私娼ししやうばい媒介いかいの廉かどで検挙せられたこの仲間ふるだぬきの古狸ふるだぬきである。お千代が現在いまの二階へ越して来た時分、この老婆もまたこのあたりへ引越して来たのである。多年の経験で、この老婆は女を一目見れば、誘惑することが出来るか否かをすぐ

に判断する眼力がんりきを持つている。殊ことに女湯の中で、着物を脱いだり着たりする様子を一見すれば、その女の過去現在の境遇は勿もちろ論ろんのこと、男の気に入る性たちの女かどうかをも誤あやまりなく判断する事ができる。お千代はこの老婆の目にとまった。その年恰好としかつこうから見ても、遊びあきて悪物食あくものくいのすきになったお客には持つて来いという玉たまだにらと睨にらんだのである。

初めて言葉を交してからもうかれこれ三月みつきぢかくになるが、今だに着通しに着ているお千代の着物を見ると、品物は金紗きんしゃの上等物でありながら、袖そでぐち口すそや裾すそまわりの散々にいたんだのを、湯屋へ来る時などは素肌すはだにきて、腰巻などは似もつかぬ粗末なものを取返えもせずすに締めてすいる。この様子だけでも、老婆はもうそ

ろそろ話をし出してもいい時分だと考えて、銭湯への行きがけ、  
内の様子を見がてら、それとはなく尋ねて来たのである。障子も  
破れ、畳も汚れた貸二階に据えてある箆笥火鉢から、机座布団に  
至るまで、家具一切はかつて資産のある種子の家にあつたもの  
ばかりなので、お千代の人品に比較して品物が好過るところから、  
老婆は最初の想像とは案に相違して、お千代夫婦の境遇を不審に  
思ったが、しかしとにかくここまで零落していれば、以前豊に暮  
していただけ、かえって話は早いかも知れないとも考えた。

「檀那様は毎日お出かけですか。」こんな事から話をはじめた。  
「いいえ。きまつておりません。唯今遊んでいるもんですから。」  
「お一人で、お留守番ばかりしていらしツちやおさむしいでしょ

う。わたくしなんでも、女中はいませんし、そう一日針ばかりも持っていていられませんから、時々人様のところへお邪魔に出掛でかけると、つい長尻ながつちりをしてしまいます。」

「男とちがって女は一人でぶらぶら散歩もしていられませんし……。」

「奥さん。どこかお遊び半分お勤めにお出なさればいいのに。気がまぎれてきつと能御ようご在ざいますよ。」

「それには女学校くらい出ていなければ駄目ですわ。わたしなんぞ、もう年もとつていますし、それに今まで大勢の人中で働いた事がありませんからね。新聞の広告なんぞ時々見ますけれど、カフエーの女給さんにもなれまいと思います。」

「奥さんがほんとにその気におなりなら、どこへ行つたつて二ツ返事でしょう。しかし……これは此<sup>ここ</sup>処だけのお話ですけれど、たとえ奥さんがその心持におなりだつて、檀那さまが御承知になれアしません。」

「どうかこうにかやつて行ける中<sup>うち</sup>は、そうかも知れませんが、ど……二ツちもさツちも行かなくなつたら外聞なんぞ構つちやいられなくなりますよ。こんな話は、おばさんだから打明けて言いますけれど、早く内<sup>うち</sup>の人が……何しろ今年の夏から遊んでいるんですからね。あるものだつてだんだんなくなるばつかりですわ。」

「ほんとにねえ。何事によらず、その中<sup>うち</sup>にその中<sup>うち</sup>にと思つて、待つている心持というものは気がくよくよしていやなもんですよ。」



一人で御留守番でもしていらつしやる時は、わたくしの処へもおいでになつて呑氣のんきに馬鹿ばなしでもして、氣をお晴らしなさる方がよう御ざんすよ。いつかもちよつとお話ししたように、少し位の事ならいつでも構いませんから、ほんとに御遠慮なく仰有おっしゃつて下さい。女は女同士ということもありますから。」

「ええ、有りがとう御在ます。しかし何ほ何でもまだついこの頃ごろのお交際つきあいなのに、そんな御迷惑をかけちや濟みません。」

「ですから、大した事はお互たがいに後あとが困りますから、何処どこのお宅でもちよつと檀那さまにも言えないような事があるもんですよ。そういう時、少し位の御融通なら、どうにでも言うんですよ。随分いいとこの奥さんで、内々ないない困つておいでの方がかたありますよ。」

「そうでしようね。しかし融通のつく中なら、えぼつて借りられ  
もしますけれど、お返しする当あてがつかないような時には、どうに  
もなりやアしません。」

ばあ婆さんは最後の問題を提出する時が来たと考えた。「奥さん。

妙な事をお話するようですよ。……何も彼も明けツ放ばなしにお話  
しをしましょう。」と相手の顔色とあたりの様子とを窺うかがいながら、

「これはほんとに内ないしよ所のお話ですよ。いつそ女給さんになった

ような心持で……お客様とどこかへ遊びに行つたような心持にお  
んなすつたら。ねえ、奥さん。身を捨ててこそ浮うかぶせ瀬ですから

ね。檀那様のいらツしやらない時、内所でお知らせしますから、  
家へいらつしやいませ……。」

お千代は婆さんの顔を見詰めながら次第に顔を赤くしたが何も言わずに俯向うつむいた。お千代は昨夜も良人おととの留守を窺つて、またしても小日向水道町の家へ出掛けたので、婆さんが勧誘する事の意味に心付くと共に、昨夜のことまで見透みすかされているような心持がして、それがため我知らず顔を赤くしたのである。

婆さんはお千代が怒りもせず泣きもせず、すこし身を斜ななめにして顔さえ赤くした様子に、此方の言つた事は十分通じたものと思つた。顔を赤くしたのは「はい」という承諾の言葉よりもかえつて意味の深いものと思つた。

「では、奥さん。お邪魔いたしました。」と婆さんは静しずかに座を立つた。

## 七

「お千代、今日からおれは内職を始めるよ。毎日歩き廻つても、靴の踵かかとがへるばかりで、どうにもならないから、諦あきらめてこれから内職だ。」と洋服の上着ぬだけ抜いで、重吉は机へ背をよせ、頭うしろを後手に抱えて両足を投出した。

「内職ならわたしも一緒に手伝います。」といいながらお千代は茶を入れかけた。

「手伝えるなら手伝ってもらおうよ。謄とう写版しゃばんで本を写すんだ。」  
「字をかくんですか。それじゃ駄目ですわ。むずかしい本でしょ

う。」

「イヤむずかしくはない。小説見たようなもんだから、後でゆつくり見せてやるよ。」と言つて重吉は突然大きな声で笑出した。

「あら、何かわたしの顔についているの。」とお千代は何がおかしいのか分らないので掌てのひらで頬ほおを撫なでている。

重吉は新聞の職業案内をたよりに諸処方々歩き廻つた末、日当いちえんごじつせん 壹円五拾銭ひつごうの筆耕で我慢することにしたのである。雇やといぬし主

のはなしによると、謄写した書物は限定せられた会員だけに配布するので検挙の虞おそれはない。万一の場合には会の名義人が責任を負うから筆耕やその他のものに迷惑のかかる気遣きづかいはないというのである。

「ひ  
一トしきり重吉の膝ひざにもたれて笑っていたお千代は坐り直なおつて、  
「それさえ大丈夫なら安心だわ。楽しみ半分がいいじゃありませんか。」

「おれもそう思つて引受けて来たんだ。しかし日当一円五十銭とは情ないよ。」

「ほんとにねえ。一円五拾銭じゃ、まるで派出婦のようね。」

「そうだったなア。むかしお前の取った給料と同じだぜ。しかし女の方がまだいい。たまには特別の収入があるからな。」

「あら、ひどいわ。何ぼわたしだって、そう誰にもツて言うわけじゃなかったのよ。あの時はあなたが悪いのよ。今になつてそんな事を言うのはあんまりだわ。」

「お千代、おれがもし病気にでもなつたら……お前、おれのために稼いでくれるか。女給にでもなつて……。」

重吉はしなだれ掛かるお千代の肩を抱くようにして上からその顔を差さ覗のぞいた。実はその後ごお千代の方から何か話をしだすだろうと、重吉は心待ちに待つていたのであるが、さっぱりその様子も見えないので、今夜の機会を逃のがさず正面から切出して女の心持をきこうと思おもい定さだめたのである。

「ええ、なつてもいいわ。」

「お前、ほんとうか。」

「ええ、あなたがなれといえはなつて見ます。」

重吉はお千代の返事が少したよりのないほど明快すぎ過るので念を

押して見ないわけには行かなかつた。しかしお千代の方では初めから重吉の命ずる事なら何でもして見ようと気軽に考えている。別に重吉のためにその身を犠牲ぎせいにすることを厭いとわないというような堅い決心からではない。何事に限らずその時々の場合に従つて何の思慮もなく盲動するのがつまりこの女の性情である。派出婦をしていた頃男ころに押えつけられれば抛よんどころ 処なくその意に従つた。真面目まじめな人から説き勧められれば嫁にも行つた。しかしこの女の辛抱しきれない事は周囲から何の彼かのとむずかしいことを言われたり、規則づくめに規律正しく取り扱われたりすることである。姑しゅうとや小姑の多勢うちいた家の妻こびなになりきれなかつたのはこの故せいである。屈辱とも不義とも思わず小日向こびなた 水道町すいどうちようの男の家へ誘われるが



ままに二度まで出掛て行つたのもまたこの性情によるのである。

女給になる事を二ツ返事で承諾したのもやはりその通りで、別に反対する理由も知らぬがまま承諾したのに過ぎない。それ故女給という職業が自分に適しているか否かは少しも考えていなかった。<sup>あらかじ</sup>予め考えてから事に従うのはこの女には出来ない業<sup>わざ</sup>なのである。

あくる日お千代は重吉に新聞の広告を見てもらつて、銀座通<sup>どおり</sup>の或<sup>ある</sup>カツプエーに行つて見たが、最初の店では年が少し取り過ぎてゐるからといって断られた。次の店へ行つて見ると、志願者が三、四十人も詰めかけているのに気おくれがしたのみならず、待つてゐる間に大勢の女がいそがしそうに往<sup>い</sup>つたり来たりしている店の様子を窺つて、始めてカツプエーのどういふものかを知り、とて

も自分にはやれそうもないと思いはじめた。その中にやつと順番が来て事務所へ呼ばれて行くと、頭髪あたまをてかてかにひからせた二十四、五の男が仔細しさいらしく住処、姓名、年齢、経歴、それからこれまでこれまでの職業などを質問した後、採否は追つて通知すると言われ、ほつとして外へ出た。

三、四日待っていたが通知は来ない。重吉は店口みせぐちに募集の貼紙りがみを出してある処を見付け遠慮なく聞いて見るがいいというので、お千代は再び銀座へ出掛けたが表通おもてどおりにはそういう貼紙のしてある店が見当らない。足の向き次第あちらこちらと歩き廻つて、大分つかれた時分、京橋きょうばしの河岸通かしのどおりが向うの方に見渡される裏通り。両側ともカツプエーばかり並んでいる中に、やつと

募集の貼出しを見つけた。

狭い店口へ南京玉なんきんだまを繋いだ簾すだれ見たようなものがさげてある下

から、踵かかとの高い靴をはいた女の足が四本ばかり見えたので、お千

代は洋装でなければいけない店だと思つて、躊躇ちゅうちよ躊躇ちゅうちよしていると

日本服をきた女が物を頬張ほおばりながら、褐色かばいろの白粉おしろいをつけた大

きな顔をぬつと出して、手にしたバナナの皮をお千代の足元へ投

げつけた。顔を見合せたのを機会に、お千代は腰をかがめて、

「女給さんを募集しておいでですか。」

「ええ。お這入はいんなさい。丁度マスターがいますよ。」と女給は

頬張ったバナナが物を言う口からはみ出しそうにするのを指先

で中の方へ押込んでいる。

お千代は南京玉の簾を搔<sup>かきわ</sup>分けて這入ると、内は人の顔も見分けられないほど薄暗い土間のままの一室で、植木や卓<sup>テーブル</sup>子のごたごた置いてある向うの片隅<sup>かたすみ</sup>に、酒場の電燈<sup>でんとう</sup>が柵の上に並べた洋酒の壇<sup>びん</sup>と、白い着物を着た男と、黒い背広を着た男二人の顔を照しているのが見えた。躓<sup>つまず</sup>きながら歩み寄つて、「表<sup>おもて</sup>に書いてありましたから……。」と腰をかがめると、背広の男が話をやめて早速住所氏名をききはじめた。お千代は此処<sup>ここ</sup>でもまた追<sup>おっ</sup>て通知をするといふのだらうと思つて、

「それでは何分よろしく。」といつて手にした肩掛を持ち直すと、背広の男は造作もなく、

「今からでもいいですよ。見習をして行きなさい。」

「それでは、そう致しましょう。」

背広の男は組頭くみがしらとも見える女給を呼んでお千代を引合せる  
と、その女給はまず酒場の後の三畳うしろばかりの室にお千代を案内し  
て羽織や肩掛をぬがせ、「わたしたちの組は赤なのよ。今日は二  
階が赤なんだから、二階へ行きましょう。」

ほどなく日が暮れると、二階中には電燈がつきながら、その薄  
暗さは階下したよりもまた一層甚しいように思われた。蓄音機が絶え  
間なく鳴響なりひびいている中から、やがて「お客様ア」と呼ぶ声につ  
れて、二人連づれの客が三、四人の女給に取巻かれ、引摺りひきず上げられ  
るように階段を上つて来た。酔つてはいないが、客も女給も諸もろと  
共もに酔倒れるように片隅のボックスに腰を落すと、二階にいる

六、七人の女が一度に立つてそのまわりを取巻く中に、一人の女が麦酒<sup>ビール</sup>二、三本を持ち運びながら、「いいのよ。口あけじやないか。」とお客を叱<sup>しか</sup>りつけた。

「飲むよりか早く芸当をしろ。」と客が怒鳴<sup>どな</sup>ると、「飲まなくつちや気分が出ないんだよ。」とまた叱<sup>しか</sup>りつけた。

暫<sup>しばら</sup>くする中<sup>うち</sup>ボックスにはお千代を入れて三人の女給が居残った。一人の客は洋装した一人の女給を膝<sup>ひざ</sup>の上に抱きあげ、和装した他の女給の袖<sup>そでぐち</sup>口へ手をいれる。それを見て、連<sup>つれ</sup>の一人がぐつとお千代を引寄せて同じように手を入れかけたが、「何だ、こいつはいやに用心していやがる。」と言って傍<sup>わき</sup>の方へ突き退<sup>の</sup>けた。

お千代はこの店の女がいずれも着物を素肌<sup>すはだ</sup>に着ている事を知ら

なかつたので、何の事だかわけが分らない。すると洋装の女が、こつちの客の方へ廻つて来て、

「この人は今日来たばかりなのよ。あんまりいじめないでよ。」  
といいながら、短いスカートをたくし上げて、その男の膝の上に跨またがつた。いつの間にか麦酒がまた二、三本テーブルの上に並べられてゐる。

お千代は十二時になつたのを知つて、店の内はまだしまわずにいたが電車のなくなるのを虞おそれて一人先へ外へ出た。家へ帰ると、重吉はまだ寐ねずに、机に向つて謄写版の写本をつくつていたので、すぐに今日のはなしが始まる。

「そうか。大変な家へ飛込んだものだな。しかしそんな家は幾軒

もありやアしまい。氣長に別の家をさがすんだな。」

「ええ。そうするより仕様がありませんねえ。表通のいい家はなかなか入れてくれないし、それに、どの道カツフェーみち向きの着物が入用いりようですからね。差当りそれが一番困ります。質しちから出したところで、あれは種子さんの物でしょう。だから、いくらほでだといつても役に立ちません。」

「うむ。銀座は何かがほでだからな。それじゃ、初め暫くの中、外ほかの町のカツフェーをさがして、それから銀座へ出るようにしたらどうだ。」

「まあ、そうでもするより仕様がありません。今更派出婦になるのも、もう怠け癖がついてますから。通勤してお金が取れるのは



やはりカツフェーでしようかねえ。」

お千代はその翌日きのう昨日のようになまた女給の口をさがしに家を出た。しかし今日は場所が限られていないので、どの方面へ行つたものかかえつて当あてがつかない。そのみならず、銀座通の裏表を歩いて、ほんのちよつとではあるがカフェーの内を窺うかがつてから、お千代はもう女給になるのがいやになっている。そうかと言つて差当り他に捜さがすべき職業はなく、また身の振ふり方かたを相談する人もない。歩きながら、洗せん湯とうで心安くなつた彼の婆かさんぼあの事を思いついて、お千代は電車の停留場まで行き着きながら俄にわかにもとの道へ後戻りをした。

婆さんは事情をきいて、「それでは奥さん、こうなさいよ。」

と言った。それは重吉の前だけ、あちこちのカツプフェーへ三、四日ずつ見習に行くような振りをして、婆さんの家で時間をつぶすがよいという事である。

婆さんの家には電話が引いてあるが秘密の漏れることを恐れて女中は置いていない。食物は時折電話でてんや物ものを取寄せ、掃除は月に一、二度派出婦を呼んでさせるので、台だいどころ 処ところの流しや戸棚の中は家族の多い貧乏世帯よりはかえって奇麗になっている。大概毎日、午後から夜にかけて男の客が来ると、婆さんは電話で女を呼び寄せ二階へ上げるが、二、三人連づれの客だと、電話で予めあらかじ女の方へ交渉して、客の方は聯絡れんらくのついている待まち合あいか旅館かへ行ってもらって家へは上げないようにしている。馴染なじみの客は用

心深い家の様子を知って、電話だけで女の周旋を頼み、随意の処へ出掛けてもらおうようにしているものもある。それ故人の出入もさほどには目立たない。

お千代はその日午後に立寄って日の暮までいる間に、婆さんのしている事をすっかり見抜いてしまった。婆さんの方ではわざとお千代に家の様子を見せて、無言の中に悟らせるつもりであった。お千代はこんな家へはあまり立寄らない方がいいと、帰道には思返しながら、翌る日になると女給の口を捜し歩くのがいやなのと行きどころがないのとでまた立寄って時間をつぶす。一日休んではまた二、三日つづけて来るといふ具合で、お千代はどうしても婆さんの家へ寄らないわけには行かなくなる。お客が一度に二

人かち合うような時には、婆さんの手伝いをして電話をかける事もあれば、留守番をたのまれることもあるようになった。重吉に對してもお千代はそう毎日々々女給の見習ばかりして歩いているとも言えないので、婆さんの知っているバーへ電話をかけてもらつて、其<sup>そこ</sup>処で働いているように体裁をつくると、いよいよ夕方から夜の十二時までには婆さんの家にいなければならぬようになる。その日その日のチツプも重吉に見せなければならぬ。或夜婆さんの家で、お客が一人二階に待つてゐるにもかかわらず、来<sup>く</sup>べきはずの女がどういふ都合だか、来<sup>こ</sup>ずじまいになつた時があつた。時計を見るともう十一時近くで、今から急に代りの女を呼ぶわけにも行かぬところから、お千代は婆さんの当惑するさまを見兼ね

て、拝むようにして頼まれるがまま二階へ上って行った。一度承知すれば後あとになつていやだとは言切れなくなる。その晩のお客が二、三日たつてまた遊びに来る。そして是非この前の女をたのむという事になればなお更断りにくい。お千代は夜ごとに深みへと墮おちて行った。その代り質屋の利息のみならず滞まだつた間代もその月の分だけは奇麗に払えるようになった。

## 八

お千代は身の秘密が重吉に知られた時にはどういふ事件が起るかということをはつきり考えてはいない。このままいつまでも、

秘密が保たれるものか否かをもまたよく考えてはいないのである。唯知れずにくれるようにと冀ねがうばかりである。秘密を保つ方法と、また秘密が許あはかれた場合の事とは予め考あらかじえる暇がない。それよりはむしろ考える能力がないのである。知れた暁には撲なぐられた揚句あげく、別ればなしになるかも知れない。しかしそうなった所で、お千代の身にはさして利害はない。重吉と別れたからといって、他に生活する道をつくわけでもなければ、また一緒になつていたからとて、重吉が失職したきりでは、やはり同じことである。重吉が定業にありつく時まで、どうか知れずにくれるように……。これが漠然とお千代の冀ねがうところであつた。

その年の暮はさほど寒さも烈はげしくはなく、もう二、三日で大おおみ

晦日そかが来ようという比ころになった。十二時打ってから半時間ばかり、いつもの刻限にお千代はバアから帰った振り、実は婆さんの家から、その夜は鳥からすもり森へ廻り、そこから円タクえんに乗って来た。コートの紐ひもを解きながら二階へ上ると、重吉も今し方がた帰って来たばかりと見えて、帽子と二重廻にじゅうまわしとは壁に掛けてあつたが、襟えりまき巻も取らず蹲踞しゃがんで火鉢の消えかかった火を吹いていた。

「銀座は歩けないくらい人が出ていたよ。」

「年の市いちでしたね。」

「銀座の方じゃ、カフェーは二十五日から每晚二時までやるんだとき。神田かんだの方よりも勉強するね。」

「やっぱりね、場所がいいから。」とは言ったものの、お千代は

神田辺でもカフェーは二時までやるのかも知れないと始めて気がつき、話をそらすために、片寄せてあつた置炬燵おきごたつを引出し火鉢の炭火を直しはじめると、重吉は懐中ふところから蠶がまぐち口を出しながら、「お千代。今夜思切つた冒険をやつたぜ。勿論もちろん偶然なんだがね。」

お千代は心配そうに男の顔を見るばかりである。

「銀座にはステッキガールが出るという話だから、それらしいやつよこちようの後をつけて横町へ曲ろうとしたんだ。するとマントオを着た男がもしもしと言つて、暗いところで絵葉書を買つてくれというのさ。実はおれも懐中にいいのを持っていたんだ。そら、この間謄写版と一緒に持つて来たやつさ。ふいと己おれもやつて見る気



になったんだよ。銀座はやっぱり銀座だな。弐円にえんになったぜ。」  
と銀貨を見せる。

お千代はびっくりするよりも、自分の秘密を思合せて、何とい  
つていいのか返事が出来ない。

「毎晩同じところへ行つちや危険だ。ときたま、散歩がてらにや  
るくらいなら、まあ大丈夫だ。」

「でも、あぶないわよ。よッぽど気をつけないと……。」

「だから冒険さ。考えて見ると、こういう事は道楽見たようなも  
んだ。言わば趣味だね。掏摸すりだの万引まんびきなんぞもやッぱりそうだ  
ろう。おれも——まさか掏摸や万引はしないけれど、後うしろぐら暗い  
事だの、秘密な事には興味がある。何となく妙に面白いもんだな

ア。いくら困つても真面目まじめな人間にやなれそうもない。」

お千代は既にその身の秘密を知られているのではないかという気がして、いつそ一思いに打明けてしまおうかとも思いながら、さて言出すべき最初の言葉がわからないので、掛けてある土瓶どびんをおろ卸して起りかけた炭火をまた直し始める。

「この金で何か食おうじゃないか。今夜はふだんと違うからまだ起きているだろう。阪まで行けばおでん屋が起きてるだろう。いやか。くたぶれたか。」

「いいえ。」

「じゃア行こうよ。今年はいやに暖あつたかいじゃないか。また地震かも知れないぜ。」

「昨日きのうなんか驟ゆうだち雨が来たわねえ。」

お千代は重吉が何か思うところがあつて外へ連れ出すのではないかと、こわごわながらも用心して一緒に外へ出た。

少し風が吹きはじめたが、薄い霧が下りているので、見渡す夜よ深ふけの街の蒼あおく静しずかにかすんださまは夏の夜明けのようで、淡あわくおぼろな星の光も冬とは思われない。起きている家は一軒もないが、まだ杜とだ絶たえない人通りは牛うし込こめみつけ見附みつけの近くなるに従したがつていよいよ賑にぎやかになる。二人の歩いて行く先に、同じような二人連づれがあつて、その話声の中から早番おそばんだの晩ばん番ばんだのという言葉が漏れ聞える。重吉は思出したように、

「お千代。お前の店は正月はどうするんだ。元日は休みか。」

「さア、まだ聞いて見ないから。」

「三ヶ日は骨休みをした方がいいぜ。バアへ行き始めてからもう三月だ。一日も休まないからな。」

お千代はまた返事にこまった。どうして今夜にかぎって、重吉は返事に困るようなことばかり言出すのだろう。知っていながら知らない風をして自分を困らせ、それをせめての腹いせにするのではないかという気もする。

「わたし、一度どうしても家へ行かなければならない事があるんです。明日にでも行こうかと思っっているんです。」とお千代は静に言出した。

「家ツて。船堀ふなぼりの家か。」

「ええ。<sup>おつか</sup>母さんが死んでから一度も行きませんから。」

「お千代、お前、もう帰つて来ないつもりだろう。そんならそうとはつきり言つてくれ。」と重吉は声を高めたが、先へ行く二人連に気がついて立ち止る途端<sup>どま とたん</sup>、「あら、誰か」という声と共に接吻<sup>つぶん</sup>するらしい音が聞えた。

「だつて、わたし……。」とお千代は足を引摺<sup>ひきず</sup>るように歩きながら、殆ど聞えないような声で、「わたし、済まないことをしちやつたから……。」

「それで、お前、別れようというのか。」

「だつて、あなた。堪忍しないでしよう。」

「堪忍しなければ、今まで黙つていやしない。お千代、みんな己<sup>おれ</sup>

が……つまり己のためなんだから仕方がない。」

「……。」

「その中には何とか生活の道を立てるから。お前、己おれに見込まれ  
たと思つて、もうしぼら姑くの間辛抱してくれ。なア。頼むよ。」と背う  
後から手をまわして静に引寄せると、お千代はそのままびったり  
倚よりかかつて、

「わたし……あなたさえ堪忍してくれれば。でも随分大胆なこ  
とをする女だと思つたでしょう。だけれど……。」

「もう、いいよ。わかつてるから。打明けてさえくれれば何もわ  
るく思やしない。」

「ほんと。」とお千代は寄りかかった男の肩先に頭を寄せかけ仰あ

向く<sup>おもむ</sup>ようにして男の顔を見た。その重みに不意を打たれて重吉はよろめきそうになつた足を踏みしめると共にぐつと抱きしめ、

「心さえ変らなければわるく思やしない。己<sup>おれ</sup>はどうから変だと思つていたんだよ。しかし己の口からはききにくいし、お前も言うまいと思つてき。それで黙つていたんだ。お前、随分気をつかつたろう。」

先へ行く二人が此方<sup>こなた</sup>の話声に心づいたらしくちよつと離れて振り返つたが、同じような二人連と見て安心したらしくまた寄添つて歩いて行く。お千代はその後姿を遠く霧の中に眺めながら、

「ええ。それア心配したわ。だけれど、ねえ、あんた。どうしてわかつたの。」

「どうしてツて。それアわかるさ。お前、バアへ稼ぎに行くといつているのに、一遍ぺんも酔つて来たことがないし、着物にも酒の匂においが移つていない。それから足袋たびがちつとも汚れていない。だからバアやカフエーじゃないと思つたんだ。」

「全くねえ。」

「そればかりじゃない。まだ他ほかにわかるわけがあるんだ。」と重吉は再び女の身をぐつと引寄せながら、二、三步黙つて歩きながら、「それアちよつと言えないよ。こんな処じゃア……。」

「どうして。教えてよ。」

「あんまり侮辱したようになるから。」

「かまわないから、教えてよ。よ。よ。」とお千代はわざと調子



だけ冗談らしく甘えるようにしながら、じつと眼を見張つて男の顔を見上げる。その表情が街燈がいとうの光を斜ななめに受けていかにも艶なまめかしくまた愛くるしく、重吉の眼に映じた。

重吉は歩みを止めて、お千代の仰向うしろいて自分の顔を見詰める眼の上に接吻しようとしたが、突然後うしろから照しつける自動車の光に驚いて女をかばいながら片側に立寄つた。見れば先へ行く二人連も同じように道をよける。汽車の走はしりすぎ過る響がして、蒼茫そうぼうたる霧の中から堀ほりむこう向の人家の屋根についている広告の電燈が樹この間まから見えるようになった。

堀端ほりばたの屋台店で二人はついで飲んだことのないコップ酒を半分ずつ飲み合い、吹きまさる風と共に深夜の寒さの漸ようやく烈はげしくな

るのを忘れて、ふらふら戯れながら家へ帰つて来た。その夜から二人の心と肉体とはいよいよ離れがたく密着するようになった。重吉はかつて我儘わがままで身の修おさまらない年上の女と同棲どうせいした時の経験もあるので、下手したでに出て女をあやなすことには馴なれている。世間一般の男の忍び得られない事をして見るのが、今では改められない性癖のようになっていた。重吉には名誉と品格ある人々の生活がわけもなく窮屈に、また何となく偽善らしく思われるのに反して、懶惰卑猥らんだひわいな生活がかえって修飾なき人生の幸福であるようにも考えられている。お千代と同棲してから四、五年を過ぎてその生活はいつか単調に陥りかけていたのが、その夜から俄にわかに異様な活気を帯びて来た。それは自分と同棲している女が折々他の

男にも接触するという事実を空想すると、重吉はその事から種々なる妄想もうそつを誘起せられ、烈しく情慾を刺戟しげきせられるがためである。

お千代の方では公然おつと夫の許可を得て心に疚やましいところがなくなくなったのみならず、夫のために働くのだということから羞耻しゅうちの念が薄らいで、心の何処どこかに誇りをも感じる。それに加えて、お千代は若い時分から誰彼にかぎらず男には好かれていたという単純な自惚うぬぼれを持っている。船堀ふなぼりの家うちにいた時分じぶんには近処の若いもののにちやほやされた。屋敷奉公に出れば書生いどにからかわれ、派出いど婦いどになれば行つた先々で折々主人いどに挑いどまれた。それをお千代は侮辱だとは思わず、自分は男に好かれる何物かを持っているがため

だと考えていた。この何物かは年と共に接触する男の数が多くなるに従つて、だんだんはつきりと意識せられ、内心ますます得意を感じる。自分は重吉に愛されている。そのように他の男からもまた愛されるに違いないと極めて簡単に考えているので、来年はもう三十三という年齢としさえも忘れたように、唯ふわふわと日を送ることが出来るのであつた。

## 九

重吉が麻布谷あざぶたにまち町の郵便局から貯金を引出して帰つて来たその日、お千代は稼いぎに出たまま夜ふけになつても帰つて来なかつた。

泊ることは珍らしくないので、その夜は別に心配もせず、重吉はいつものように、折々ひとりね独寐する晩をばかえつて不断の疲労を休める時として、あくまで眠りを貪むさぼるのであった。しかし翌日、暮がたれ方近くなつてもお千代はまだ帰つて来ず、電話もかけて来ない。重吉は何か間違いでもありはしないかと、少し心配をしはじめた。

昼飯ひるめしの残りを蒸返むしかえし、てつか味噌みそと焼海苔やきのりとを菜さいにして、独り夕飯を食べてしまつてから、重吉は昨日きのうの午後お千代を呼んだ芳沢よしざわ旅館へ電話をかけて問い合わすと、その日の夕方まで其そ処こにいたことは分つたが、それから後の行先がわからない。日頃ひごろ鼻屑ひいしきにしてくれる待合まちあい二、三軒へ問合したがやはり同じことである。重吉はいよいよ気になつて、日頃お千代が親しく往來ゆききして

いる同業の女のもとへ問合すより道がないと思つたが、これは電話の番号がよくわからない。鏡台の引出しか何処かに何か書いたものでもないかと捜<sup>さが</sup>して見たが何も見当らない……。

「中島さん、どなたか見えましたよ。」とその時硝子屋<sup>ガラスヤ</sup>のお上<sup>かみ</sup>さんの声がしたので、重吉は梯子<sup>はしご</sup>段<sup>だん</sup>を三、四段降りながら下<sup>のぞ</sup>を覗くと、昨日の午後溜<sup>ため</sup>池<sup>いけ</sup>の角で出逢<sup>であ</sup>つたかの玉子である。

「お上んなさい。」

「千代子さんは……。」

「今出掛けているんだが、ちよつと話があるから、まアお上んなさい。」

玉子は硝子屋の家族に軽く挨拶<sup>あいさつ</sup>して重吉の後<sup>あと</sup>について二階へ

上る。

「昨日は失礼しましたわ。」

「あれから、家へ寄るかと思つて待つていたんだよ。貸間はきまつたか。」

「あの、溜池の家うちねえ。実はきめたんだけれど、階下したの人が新聞社へ出る人だつていうから止よしたのよ。今日も一日さがし歩いたけれど電話の使える貸間はなかなかないわね。」

「この近処うちなら、ここうちの家の電話で呼出しがきくよ。己おれが迎いに行つてやるから。」

「じゃ、そうしようか知ら。わたし、もうそういう事にきめるわ。千代子さん、まだなかなか帰りそうもないこと？」

「実は昨日の昼出たツきりなんだ。間違いでもあつたんじやないかと心配しているんだよ。電話のある処は大概きいて見たんだが、そこにはいないんだ。以前飯田町いいたまちにいた荒木の婆さんばあの家へも電話をかけたが、どうしても通じないんだ。今は四谷よつやにいるんだからね。実はこれから行って見ようかと思つていたところさ。」

玉子は久しく婆さんの家へ出入りをしないから、今度また出先を周旋してもらうために、重吉と一緒に言出した。

ほんむらちよう ほりぼた  
 本村町の堀端から左へ曲つて、小さな住宅ばかり立ちつ  
 づく薄暗い横町よこちようをあちこちと曲つて行く中、重吉も一、二度

来たことがあるばかりなので、その時目じるしにして置いた郵便箱を見失うと、道をきくべき酒屋も煙草屋たばこやもないので、迷い迷つ



て遂に津ノ守かみぎか阪の中途ちゆうとに出てしまった。驚いてもと来た横町に戻り、薄暗い電燈をたよりに、人家の軒下や潜門くぐりもんの表札に番地を見定めながら、やっとの事で目的の家へ行きついた。

潜門をあけると、付けてある鈴が勢いきおひよく鳴ったが、格子戸の内は真暗まつくらで、一、二度呼んでも出て来るものはなく、折から電話の鈴が家の内で鳴り出したのが聞えながら、やはり人声はない。ややしばらく姑鳴り通しに鳴っていた電話の鈴がはたと止やんだ時、二人は始めて奥の方から人の苦しみ唸うなるような声のするのを聞きつけて、顔を見合せた。

「おばさん、病気なのよ。誰もいないのか知ら。」

「金持だから殺されたんじゃないか。」

「あら、いや。おどかしちゃア。」と玉子は重吉に抱きついた。

「まア上つて見よう。」と言つたが、重吉も何やら気味がわるくなつて、土間に立ちすくみながら、そつと手を伸のばして障子を少し明けて見ると、家の内の電燈は一ツもついていないらしく、一ひとき際はわつきり聞える唸うめき声は勝手に近い方から起るものらしく思われた。

「何だか、おれ一人じゃ上れないな。玉ちゃん、台処の方へ廻つて見よう。ふだん女中を置けばいいんだのに。」

「お隣となりうちの家へそう言つて、誰だれか来てもらつたら。わたしほんとにいやだわ。」と言つた時、唸うめ声はまた一層はげ烈れつしくなつたので、玉子は思はず格子戸の外へ逃げ出すと、重吉もつづいて外へ出なが

ら、

「隣り近処も、不斷つき合ふだんいをしていないだらうからな。まあ病気だか何だか、様子を見てからにしよう。」

勝手口へ廻つて恐る恐る硝子戸ガラスドを明けると、家の内のどこかについている電燈の光で、台処の板の間まと茶の間らしい部屋との境に立っている障子際ざわに、白髪しらがを振乱して俯伏うつぶしになつた老婆ろうばの姿が見えた。重吉は半身を外に、顔だけを硝子戸の内に突出して、

「おばさん、荒木さんのおばさん。病気か。」

老婆は唸うなるばかりで、殆ど人事不詳ほとんの重態であるらしい。しかしきちんと片付いている台処の様子を始め、そのあたりにも血の流れながしぐちている様子は見えないので、重吉はやや安心して流ながしぐち口へ

進すすみい入り揚あげいた板いたの上に半身を伸のばして、再び、

「おばさん、荒木さんのおばさん。」と大声に呼びつづけたのが  
 やつと耳に入つたらしく、老婆は障子につかまって身を起そうと  
 した。その顔を見て、重吉は思わず、「あ」と叫ぶと、外に立っ  
 ていた玉子は何やら物に躓つまずきながら潜門の外まで逃げ出した。老  
 婆の顔は平生の二倍ほどにも見えたくらい一面に腫はれ上つて、目  
 も鼻もなくなつたようになり、口ばかりが片方に歪ゆがみ寄つていた。  
 この形ぎようそう相そうを障子越うしろしに後から照す電燈の光にちらと見た瞬間、  
 重吉は化物かと思つたのである。

外へ逃げ出した玉子が隣の人をつれて来た。やがて近処の医者  
 が呼ばれて来たが、その診察によると老婆の病やまいは齒根骨膜炎しこんこつまくえんと

行って、こうこうげか口腔外科の医者に手術をしてもらわなければならないという事であつた。仕方がないので重吉は玉子と共に四谷のおおとお大通りへ出て、やっと歯医者をさがし、再び診察してもらうと、今度はいよいよ重症ということで、歯科医が附添つて慶応義塾けいおうぎじゆくの病院へ患者を送つた。

医者のはなしでは顎骨あごほねを腐蝕ふしょくした病毒が脳を冒せば治療の道がないとのことである。重吉が玉子と共に病院を出たのはその夜も十時を過ぎた頃である。

「玉ちゃん、今夜は実に変な晩だな。荒木の婆さんはきつと助かるまいよ。」

「そうかも知れないわね、あの様子じゃア……。」

「内のやつもどうかしたかも知れない。」

途中で乗った円タクを硝子屋の店先へつけさせ、裏口から二階へ駈上かけあがって、貸間の襖ふすまを明けかけると、中にはいつの間まにか夜具が敷いてあつて、後うしろむ向きに寐ねているお千代の髪が見えた。重吉も玉子も、自動車か何かで怪我けがをしたものと思込んで、覚えぬ大きな声で、

「お千代、どうした。」

この声にお千代は睡ねむりから目をさまし、「お帰んなさい。」  
「どうかしたのか。」と重吉は立ったままである。

「千代子さん。しばらく……。」と重吉の後に玉子も立っている。  
「あら、玉ちゃん。一緒……。」とお千代の方ほうでも不思議そうな

顔をしながら起きかける。

「どうもしたんじやないのか。」

「どうもしないツて、どうしたの。」とお千代は重吉の様子にいいよよ不審そうに眼を見張った。

「でも、まア、よかつたわ。御無事で……。。」と玉子は初て気がついたらしくコートをぬぎかける。

「あら。おかしいわね。」

「おかしいどころか。心配したぜ。昨日きのうの昼間出たつきり電話もかけないからさ。」

「あら、電話は女中さんに頼んだのよ。じゃア忘れてかけてくれなかつたのよ。すみません。」

「荒木の婆さんが死にそうなんだ。」

「わたし、あの時は実に怖こわかったわ。顔がこんなよ。」と手真似てまねをして、玉子が一いち伍ぶ一いち什じゅうを委くわしく話した。

「今夜ほど、妙な晩はない。お前は怪我けがでもしたんだろうと心配するし、尋ねて行つた先は大病で唸うなっているし……。」と重吉は疲れたようにごろりと横になつた。

「ほんとに妙なことがあるものね。わたしの方も昨夜は実に困つたことがあつたのよ。滑稽こっけいな事なのよ。だけどあんな可笑おかしなことは、しようたつて出来ないわ。」

「何なんだ。独りで笑つていたつて、わからない。」

「だって、考え出すと、あんまり滑稽で、話ができないわ。お客



をまちがえてしまったのさ。わたしも随分そそツかしいと思つて自分ながら呆あきれてしまつたわ。」

「いやだわ。千代子さん。」

「それが時のはずみだから仕様がないのよ。昨日芳よしざわ沢旅館の帰かえりみち

道みちだわ。新橋しんばしのガードの下であるお客様に逢あつたのよ。御ご

飯はんにさそわれて、銀座の裏通のおでん屋へ行つたから、帰りにデ

パートへ連つれこ込んで何か買つてもらおうと思つてさ。二人でぶらぶ

ら銀座を歩いたのよ。丁度人の出さかる時分だから松屋の前なん

ぞは押されたり、突当つたりされて歩けないくらいだつたわ。立

止つて店みせ飾かざりの人形を見ていると、酔よッ払つた学生がわぎと突

当りそうにしたんで、わたしは少し側わきへ寄る。その中うちに男おとこの方が

ふたあしみあし  
二歩三歩先になつて、夜店の前に立留たちどまつたから、わたしも立留つたのよ。人が大勢たかつていて、何も見えないから、だんだん押分けて見ていると、後うしろからいやに押す人があるから、何の気なしに振返つて見ると、わたしのお客は人を置去りにして向むこうの方へ歩いて行くんじゃないの。急いで追付いて手を引張つたけれど、また押返されて、くつついたり離れたりして四、五間けん歩いて行つたのよ。少し人のすいた処へ来たから、ぴつたりくつついて、あなたと言つて横顔を見ると、どうでしょう。違つた人じゃないの。帽子も二重廻にじゅうまわしも背恰好せかつこうも後から見るとまるで同じなんだけれど、違つた人なのさ。わたし、あんまり気まりがわるいんで、失礼とも何とも言えないで、真赤まっかになつて唯ただお辞儀じぎをしたわ。す

ると、その男の人は笑いながらわたしの手を握って、「もう歩いてもつまらないから、円タクで行きましょう。」と道端みちばたにいる円タクを呼んで、まるで自分の女見たようにわたしを載せて行こうとするのよ。運転手は戸をあけて待っているし、人通りの込こんでいる中だし、愚図ぐずぐず々々言い合うのもかえって見つともないと思つて、一緒に円タクに乗ってしまったのさ。浜町はまちようまで五拾ごじっせ銭せんだと言って、それから男の人はわたしの耳に口を寄せて、

「あなた、毎晩銀座を歩くのか」ツていうのさ。わたしのことをストリート街ストリート 娼ちやうだと思つたのよ。別に申もうしわけ 訳わけするにも及ばないから、だまつて向うの言うようにしていたのさ。」

「お前もなかなか敏捷はしっこくなったよ。話はそれから先が聞きもの

だ。」と重吉は笑う。玉子も傍から、

「どこへ連れられて行つたの。」と水を向けたが、その時階下の時計の鳴る音がしはじめたので、自分の腕時計を見ながら、

「あら、もう十二時。そろそろおいとましくツちや。」

「いいじゃないの。泊つておいでよ。彼氏のおのりけも聞きたいしサ。」

「あれはもう駄目。今日すっかり兄さんにいにお話したのよ。」

「そう。別れたの。」

「ええ。」と玉子が話をしはじめようとした時、今度は電話の鈴さかがそれを遮さかった。お千代は十二時前後になつて電話のかかつて来るのは、表二階の女給さんと自分のところより外ほかにはないことを

知っているのです、急いで降りて行き、すぐに立戻つて来て、  
「玉ちゃん、わたし今夜はもうつかれているから、あなた、出る  
気があるなら代りに出てくれない？ それなら、そういう風に返  
事をするから。築地つぎじのお茶屋で、いい家なのよ。」と指先の暗号  
で何やら数字を示した。

「ええ。いいわ。」と玉子は領うなず付いて、「おとまりね。」

「でしよう。だからコレ。」とお千代はまた暗号で念を押しのちした後、  
電話の返事をしにと下へ降りて行った。

## 十

あくる朝お千代はとにかく一度荒木のおぼさんの様子を見て来ようと言つて、病院へ出掛けて行つた。重吉は昼頃まで寐ねるつもりで再び夜具の中へ這はい入つて、うとうとしたかと思つたと、襖ふすまの外外からお千代の名を呼ぶ女の声を聞きつけた。玉子が昨夜ゆうべの出先からかえりみち帰かえり途ちに立寄つたものと思つて、

「お這はい入り。今病院へ行つたよ。」と言いなながら襖のあく方へ寐返りして見ると玉子ではなくて、髪を流行おくれの束そく髪はつに結つた三十前後の女中らしい女である。見た顔ではあるが重吉は誰だとも思ひ出せない。女はずかずかと枕まくらもと元もとまで歩み寄り、立つたまま、いきなり、

「大変なの。」と言つた。この様子と語調とで重吉はすぐに万事

を察したらしく、

「そう。わざわざありがとうございます。」と言いなから飛起きると共に壁にかけた着物を取り、「どちら様でしたね。つい……。」

「芳沢旅館です。唯たった今お上かみさんがつれて行かれたんですよ。

それから帳場にもう一人の刑事さんが張込んでおきみさんを外へ出さないようにしているんです。帳場に方ほう々の電話番号の書い

た紙があるんですよ。それを見られると、皆さんが迷惑すると思つてね。わたしは丁度はばか憚りに入っていたから、外へ逃げ出したん

だけれど、一いっせん銭も持っていないから、自働電話をかける事も出来なんでしょう。お千代さんとはこの間金毘こんびら羅さまの帰りに

表まで一緒に来ましたから。それでお知らせしに来ましたの。」

「ここの家の電話じやまずい。やッぱり自働になさい。一円立替えます。」と重吉は袂たもとから小銭こぜにを出す。

「じや、暫しばらくお借りします。」

「いずれまた電話で。」と重吉は女中と共に梯子段はしごだんを降りると、直様すぐさま慶応義塾病院に電話をかけ、お千代を呼出して、「家へは

帰つて来てはいけない」と言つて暗あんにその意を含ませ、二階へ上

つてから手早く鏡台や何かの引出しをあけて手紙や請取書うけとりしょなど

の有無を調べ、押入おしいれからトランクと行李こうりと手提革包てさげかばんを引ずり出

した後、外へ駈出かけだし、円タクを二台呼んで来て、夜具を始めとし

て積まれるだけの物を積み込ませた。家主やぬしの硝子屋ガラスやへは出放題の

事を言つて、間代まだいの残りも奇麗に払い、重吉は荷物の半分を新しんば



橋駅しえきの手荷物預り処に預け、夜具と手提革包を載せた自動車に乗つて浅草あさくさ千足町せんぞくまち一丁目の藤田という荒物屋をたずねた。松竹座の前を真直まつすぐに南千住みなみせんじゆへ出る新開しんかいの大通りである。この荒物屋はお千代の妹の嫁に行つた先で、兼かねてよりお千代は万一の場合隠れ場所にするつもりで既に重吉をも紹介して置いたのである。

夜具と手提革包を預けてから、重吉はすぐさま貸間をさがしにその辺を歩き廻つて、午頃ひるごろ帰つて来た時始めてお千代と落合つた。

荒木のおばさんはお千代が見舞に行つてから三十分ばかりたつて息を引取つたという。しかし二人はこの場合落ちついて死んだ

人の話などしている暇がない。天どんを誂あつらえて昼飯をすますが否や、二人は別々に貸間を捜さがし歩くことにして、その日の夕方荒物屋に帰って来た時、お千代の方は大鳥神社の筋向すじむかいの横町に米屋の二階をさがし当て、重吉の方は浅草芝崎町あさくさしばざきちょうの天岳てんがく院いんに日輪寺にちりんじという大きな寺のあるあたり、重おもに素人屋しもたやのつづいた横町に洗濯屋の二階を捜した。いずれも店に電話があるが、米屋の方は朝鮮人の運転手が二人同居している。洗濯屋の方はおめかけ妾さんばかりだというので、二人はこの方へ早速夜具と革包とを運んだ。

「お千代、どうしたもんだな。鏡台に、火鉢に、それから机と茶棚が残してあるんだが、今夜おそくならない中うちに、様子をききな

がら取りに行こうかと思つてゐるんだ。」

「そつと電話できいてからにおしなさいよ。警察から人が来たか、  
どうだか……。」

「今まで来なければまず大丈夫だな。」

「そうとも限らないわよ。去年玉ちゃんのやられた時なんざ二日  
たつてから呼出しが来たんだつていうから。」

「みんな一度はやられてゐるらしいな。土つかずは服部はっとりのおし  
ゆんさんとお前くらいなもんだというじゃないか。」

「税金だと思やア仕方がないけれど、誰しもあんな処へは行きた  
くないからね。また当分名前を変えましょうよ。」

「何という名前にする。」

「何でもいいじゃないの。一番初め、偽名した時は橘たちばなだったわね。」

「うむ、あれは死んだ種子みょうじさんの苗字を拝借したのさ。」

「もう四、五年になるわね。荒木のおばさんは死んでしまいうし、今じゃ、その時分の名前を知っている人はないはずだわ。」

「じゃ、偽名は橘にしよう。下の家主さんへもそう言つて置しくぜ。それからちよつと芝の家へ電話をかけて見よう。」重吉は階下したの電話を借りて、今朝方けさがたまでいた硝子屋ガラスやへ様子ききあわを聞き合あすと、誰も尋ねて来た人はないとの返事に、やや安心して、二人は連立つれだつて貸間を出た。

横町の片側は日輪寺のトタンの扉であるが、彼方かなたに輝く燈火とうかを

めあて

目当に、街の物音の聞える方へと歩いて行くと、じきに松竹座前の大通に出る。田原町たわらまちの角に新聞売が鈴を鳴ならしているのを見て、重吉は銅貨をさがし出して、『毎夕新聞まいゆう』に『国民』の夕刊をまけさせた。

「今朝けさの事だから、まだ出ていないかも知れない。」と歩きながらまず『毎夕』をひろげて見て、「根津ねづの松岡がやられたんだ。

芳沢旅館の事は出ていないが、ヤツぱりその巻添いだろう。」

「女じや誰が挙げられたの。」

「本郷区ほんごうく富坂町とみざかちよう、太田てつ。大塚辻町おおつかつじまち宮原こう。赤あかさ

坂区か氷川町ひかわまち吉岡つゆ……。」

「吉岡さんもやられて。あなた。知ってるでしょう。せいのある

まり高くない、洋装した人……。」

「うむ。谷町たにまちにいた時分家へ泊ったあれか……。まだ大分いる

ぜ。」と重吉は『毎夕』をお千代に渡し、自分は『国民』の方を開いたが、お千代は往来の人目を憚はばかって新聞を畳みながら、

「松岡へ出入するのは安玉やすだまばかりだからね。」

「お前、行ったことがあるのか。」

「二、三年前のことだわ。客種もぐつと落ちるわね。あすこは。」

ひろこうじ  
広小路へ曲ると、夜店でそろが出揃でそろって人通りも繁しげくなったので、

二人はそのまま話をやめて雷かみなりもん門かみなりもんまで来た。

「お前、これからどうする。行く処があるのか。」

「そうね。ちよつと浜はまちよう町へ行こうかと思ってるのよ。そら、

昨夜話をした銀座のお客さ。わたしをストリートだと思つて、連れて行つたお客さ。その時今夜来てくれつて、約束したから。」

「時節柄大丈夫か。」

「浜町公園の側だし、今までわたしたちの知らない家だから、その心配はないわ。だから、ここのところ、方面を替るにもいいし、十二月早々引越貧乏もしたくないからね……。」

円タクに乗つて、重吉が芝桜川町へ行く途中、お千代は明治座の前あたりでおろしてもらつた。

広い道を横断つて、お千代は竈河岸の方へ曲る細い横町の五、六軒目、深草という灯を出した家の格子戸を明けると、顔を見覚えていた女中が取次に出て、「今し方御電話で、すぐにお見え

になりますッて。先へお出でになつたら待つていて下さいッて。電話がかかりました。」と言いなながら、一昨日おとといの晩通ばんした同じ座敷へお千代を案内した。

## 十一

女中が茶と共に『報知新聞』の夕刊と『都新聞みやこ』とを置いて行った。お千代はまず『都』の方をひろげて松岡と芳沢旅館との記事を捜したが出ていないので、『報知』を見たがこれには錦きんしゆ州うと天津てんしんの戦報ばかりで、女の読むようなものはない。コートのかくしに『毎夕新聞』のあつたことを思出して、一字一句も



読みおとさないようにその記事を黙読した後、つかまつた女たち十二、三人の住所姓名に眼を移したが、ふとその中に深沢とみ（十九）という名があるのを見て、お千代は小首こくびを傾かたむけ、それからまぶた瞼を軽く閉じ、指を折って年を数えた。

深沢というのはお千代の苗字と同じである。とみという名は、お千代が十八の時生んだ私生児の名たみに似て、唯一ただ字ちがうだけである。また括弧かっこの中にしるされた十九という年齢を数えて見ると、大正二年の夏に生んだ児この年と同じである。深沢とみ（十九）と紙上にその名を晒さらされたのは自分の生んだおたみであるのかも知れないと、お千代はいわれなくそう思ったのである。

お千代が娘のおたみを養女にやったのは、今から十四、五年前、

雑貨商の妻になると間もなく、別ればなしの起りはじめた頃であった。養女にやった先は女髪結の家であつたが、その後は全く音信不通なので、娘が身の成行きは知られようはずがない。お千代は新聞紙上のおとみが、どうやら理由なく娘のおたみであるような気がする。そして自分と同じ日蔭の身だという事を考えると、慚愧の念よりも唯むやみに懐しい心持がし出して、その顔が見たく、そして話がして見たくてならないような心持になった。大通の方から号外売の叫ぶ声が聞え、どこか近くの家からは賑々な人声が聞える。茶ぶ台の上に肱をついて、ぼんやり思に沈んでいたお千代はやがて梯子段を上つて来る人の蹠音と女中の声とを聞きつけ、大切そうに『毎夕新聞』をたたんだ。

「お見えになりました。」という女中の声と共に襖ふすまがあくと、いきみ出したような声で笑いながら、一昨夜のお客が座敷へ這入はいるが否や、「大分待ったかね。」といいさま、女中の見る前もかまわず、二重にじゅうまわし廻の間から毛むくじやらの太い腕を出してお千代を引寄せて頬摺ほおずりをした。年は五十も大分越したらしく、てらてらに禿はげた頭には耳の上から後うしろの方に白髪が残っているばかりであるが、肩幅の広い身体からだはがっしりして、鼻と口との目立って大きな赤ら顔は油ぎって、禿はげた頭と同じようにてらてら輝ひかっている。この老人は杉村といって銀座西何丁目こうだいに宏こうだい大なビルジングを持つている羅紗屋ラシヤの主人である。いずこの花柳界かりゆうかいやカフエーにも必かならず一人や二人女たちの噂うわさに上る好こうしよく色の老翁ろうやがあるが、し

かしこの羅紗屋の主人ほど一見して能くその典型に嵌ったお客も少ないであろう。二、三十年間あらゆる階級の売女に狎れ親しみ、取る年につれて並大抵の遊び方では満足しなくなつて、絶えず変つた新しい刺※を求めていた。その折から偶然銀座の人中でお千代に袂を引かれ、これが噂に聞く街娼だと思つた処から、日頃の渴望を一時に癒し得たような心持になつたのである。

「湯はわいているか。」

「はい。」

「それから向の座敷を暖にして置け。ストーブを焚け。頼むぜ。」  
 といいながら早くも座敷の中で帯を解くので、女中はあわてて、  
 「唯今お寝衣を持って参ります。」と廊下へかけ出る。

「そんなものは入らない。」と毛だらけの胸の上に小柄のお千代を抱き寄せながら、「一緒に這入ろうよ。なア。」

お千代は馴れたことなので、別に驚きもせず言うなり次第に風呂場へ連れられて行つた。後から女中が二人の浴衣を持って行き、それから狭い座敷の仕度をして電気煖炉の火をつけ、やや暫くして他の客を案内しようと再び風呂場の戸をあけかけると、今だに二人の話しがしているので、その長湯に驚き登音を忍ばせて立去つた。お千代は日頃自分に対して優しくしてくれるものは家の重吉ばかりでなく、お客の中にもそういう人は珍らしくはない。それ故、たまたま醜悪な男に出会つて、常識を脱した行動を受けて見るのも、満更興味のないことではなかつた。嫌悪と憤懣

の情を忍ぶことから、ここに一種痛烈な快感の生ずる事を経験して、時にはその快感を追求しようというほどにもなっていた。それに加えて、その夜お千代は杉村を金のあるお客と見て、少しまとまった金の無心をしようという下<sup>したところ</sup>心から、その歡心を得るためには何事を忍んでも差<sup>さしつかえ</sup> 間はないという心になっていた。お千代は自分の娘らしく思われた女を留置場から貰<sup>もら</sup> 下<sup>い</sup>げる費用もほしい。また年頃の経験から素<sup>しろ</sup>人<sup>うと</sup>にかかるお客はいかに厚<sup>こうぐ</sup>遇<sup>う</sup>しても、三度以上来るものは少く、大抵二度にきまっている事をよく知っていたので、無心をいうなら、いずれにしても今夜あたりが潮<sup>しお</sup>時<sup>どき</sup>だと思つたのである。

お千代の計画は予想の以上にその功を奏した。杉村はいかほど

遊び歩いていても、己おのれの独断には疑うたがを挟いはまない、極めて粗雑な考えの人なので、お千代がその夜の態度を見て、簡単にこれほどの女は世間をさがしても容易には得られまい。一昨日の晩銀座通で自分の袖そでを引いたのも商売気ばかりではないらしいと勝手に断定を下すと共に、当然自分の持物にして置きたい気になった。唯恐るるところは付いている男がありはしないか。それも陰にかくれているのなら大した事はないが、進んで脅迫がましい事でもするような男がいなくても限らないという事だけである。名前や商売を知られない中うちに、まず女の気を引いて見るに如しくはないと思つて、

「いいさ。それ位のことなら、御歳暮の代りだ。今夜あげるがね。

それはそれとして、お前、おれの世話になる気はないか。家を持たせてやるが、承知しないか。野暮なことは言わんよ。そうむやみに自由を束縛するようなことはせんよ。」

「結構ですわ。そうなれば。」お千代の返事はあまり気乗りがしていないように聞えた。

「承知したのか。そんなら事は早い方がいい。おれは思立つと、愚図々々していられない性分だからな。明日にでも早速家をさがさないか。」

「ええ。」

「どこでもいいんだ。京橋か日本橋にほんばしの中うちならおれには一番便利なんだ。ここの家へ電話でそう言ってくれれば、おれの方ではい



つでもいい、見付け次第借りてしまおうよ。」

「じゃ、早速さがして見ます。」

「お前、おツかさんか誰かいるのか。」

「今のところ、一緒にはいません。」

「兄にいさんも叔父もなしか。ははははは。そんな事はまアどうでもいい。」

「あら。何もありません。あればこんな事してはけません。」

「おれはお前を信用するよ。身元調べは面白くないからな。」

「こう見えても、わたし案外正直なんですよ。御迷惑になるようなことはしません。」

「だから、初ツから信用しているというんだ。今夜また泊るか。」

どうする。」

「どつちでも構いませんけれど、明日の朝早く用があるんです。お墓参りに行きますから……。」

お千代は金が入ったとなると、一刻も早く娘らしく思われる女<sup>さ</sup>の消息が知りたくてならないのであつた。幸にも十二時近く<sup>さいわい</sup>になつて銀座の方に火事があつたので、杉村は急に<sup>かえり</sup>帰仕度をした。

## 十一

いつも退屈で困っていた重吉は、その夜お千代から相談をかけ

られて話をきめると、にわか俄に用事が多くなつて、からだ身体が二つあつても足りないような心持になつた。用事の第一はお千代の身をはげあ禿頭たまのかこいもの匪者かこいものにするためには、急に家をさが捜して、今日引越したばかりの貸間を引上げる事、それと共にしようたく妾宅しようたくのもよ最寄りに自分の身を隠すべき貸間をも同時に捜さねばならぬ事である。また一ツは松岡というろうば老婆と女たちの大勢拘留せられた警察署へ往いつて、深沢という女が果してお千代の娘であるか否かを確めた後もらいさ貫下もらいさの手續をする事である。

妾宅の方は新聞の広告で思ったよりはたやすく捜すことが出来たが、他の用事はなかなか面倒で即座には運びがつかない。重吉が警察署へ出頭した時には深沢という女は既に放免せられた後で

あつた。しかしその女の原籍から推察してお千代の私生児である事だけは確められたものの、それと共に不審の生じたのは、養女にやったものの籍が、その後書替かきかえられていないと見えて、今もつて出生の時のままお千代の児こになつてゐるらしい事であつた。重吉は深沢が拘留せられた時の住所を尋ねて、本人に会おうとしたが、放免の後行先を言わずに貸間を引払つたといふので、更に松岡という媒介業の老婆の放免せられるのを待つてその家をたずねたが、やはり徒勞むだであつた。やむことをえず、最初養女に貰受けた人の所在を尋たずねだねだ出たせようと試みたが、これさえ今は年月を過ぎて不明になつてゐる。

その年はいつにも増して一層あわただしく暮れたような心持で、

お千代は八丁堀はっちようほりの妾宅わづかに、重吉は僅二ちよう、三町しんとみはなれた新富しんとみ町ちようの貸間ゆくえに新年を迎え、間もなく二月ぢかくなつたが、尋ねる人の行衛ゆくえは一向にわからなかつた。

重吉は檀那だんなの杉村が来る時刻を見計らつて、きわどい時まで妾宅ねおに臥起ねおきをしている。表の格子戸の明く音と共に裏口から姿を消し、夜の十二時頃に戻つて来て、二階の裏窓に火影ほかげが映つていればこれは杉村が泊るといふ合図なので、そのまま自分の貸間に帰るのである。明るあくる日表の格子戸を覗のぞいて、下駄箱げたばこの上に乗せた万年青おもとの鉢うしろむきが後向うしろむきにしてあれば、これは誰もいないといふ合図なので、大びらに這入はいるが、そうでない時はそつと通り過ぎてしまふ。まるでむかしの人情本にでもありそうな密夫みつぶの行動が、重吉

には久しく馴なれた夫婦同棲どうせいの生活とは変つて、また別種の新しい刺しげき※と興味とを催させるのであつた。

あるよ或夜重吉はもう来ないと思つた檀那こうしどの杉村が突然格子戸を明け

る音に、びつくりして裏口から逃出すと、外は寒い風が吹いてい

る。しかし八丁堀の通には夜店が出ていて人通りも賑にぎやかなので、

知らず知らず歩いて桜橋さくらばしまで来ると、堀割の彼方あなたに銀座の火

影が遠く空一帯を彩いろどつている。また知らず知らず京橋まで来る

と燃えるような燈火とうかと押返すような人通りの間から、蓄音機の軍

歌と号外売の声とが風につれて近くなつたり遠くなつたりして、

雑沓ざつとうする夜の街の心持を一層きびしくさせている。橋を渡りな

がら、重吉は上シャンハイ海事変の号外よりも、お千代が初めて銀座通

で頭の禿はげた杉村の袖そでを引いた時のことを想像した。つづいて杉村の醜みにくい容貌と、お千代がさしてこれを厭いとう様子もなく歡かんぐう遇ぐしているありさまを思おもい浮かうかべ、女の性情ほど変なものはないと思つた。重吉はこの年月仲間の女や媒介業の老婆などの陰口を聞いて、お千代がお客に好かれる訳わけ合あいを能よく知つていたのであるが、しかしそれは要するに噂うわさに聞きくばかりの事で、直接お客の面か貌おを見知つた後お千代のこれに対する様子をはつきり窺うかがい見る事を得たのは今度始めて妾宅へ引移つてからの事であつた。しかし重吉はなさけないとも、口惜くししいとも、また浅間あましいとも思わない。唯そんな事を考えて、沈ちん鬱うつな重おもくろろしい心持になつて、ふらりふらりと夜の町をさまよい、暗いカフェーの店口から白粉おしろい

を塗った女の顔や、洋装した女の足の見えたりするを窺い、あるいは手を引合つて歩く男女に尾行してその私語ささやきを偷み聞きぬすする事を悦ぶよろこのであった。

薄暗い河岸通かしどおりから人通の少い裏通へ曲ると、薬屋の窓まどに並べたあるものが目についたまま立留たちどまつて見ていた時、重吉は身近に立寄る女があるのに心づいて振返つて見ると、それは桜川町の硝子屋の二階にいた頃、表の部屋をかりていた伊東春子という女給である。

「あら、中島さん。お久しぶりねえ。」

「やはりあすこにおいでですか。」

「いいえ。歌舞伎座かぶきざの裏の方へ越しました。あなたは何処どこ。」



「新富町です。」

「千代子さん。お変りもありません。」

「すこし都合があつて、別になつています。」

「あら。ほんと。」

「時たま別になつた方がいいんですよ。」

「あの時は随分聞かされましたからね。」

「お互さまでしたらう。」

「中島さん。お願いがあるのよ。あの、写した本、もうないこと

。」

「今、持っていないませんが、二、三日中でよければ写して上げます

。」

「じゃお願いするわ。こんどの店は服部時計店の裏通りでカルメンというのよ。」

「尾張町おわりちようの裏ですね。」と重吉は聞き直した。夜も九時頃なのに、尾張町のカフェーにいる女がぶらぶら京橋近くを歩いている理由がわからなかったのである。

「こつちから行けば左側で、小さい店だけれど直ぐすわかりますよ。」

「これから、お出掛けなんですか。」

「不景気だから、苦しまぎれにいろいろな事を考えるのよ。店が暇になると、ぶらぶら出掛けてお客を引くのよ。カフェーもこうなっちゃアおしまいだわね。」

「ああ、なるほど……。」「重吉は再び去年お千代の為なした事を思返し、銀座を徘徊はいかいする女にはいろいろ種類があることを知った。

「店へ引張って行くんですか。それとも……。」「

「中には大胆なものもあるわよ。」「

その時向むこうから歩いて来る断髪洋装の女が、春子の友達と見えて、  
「今あすこの横町でルンペンが仁義をやっていたわ。銀座といつても広ひろう御在ございます。はははは。」「

「また御機嫌だね。」「

「一口に銀座といつても広ひろう御在ございます……。」「

重吉はその女の顔を見ると、二、三年前麻布あざぶ谷たに町まちに間借りをしていた頃、お千代をたずねて来て一晩泊って行った吉岡つゆと

いう女で、去年十二月の初め『毎夕新聞』にその名を晒さらされた連中の一人である。女の方ほうでもそれと心付いたが春子の前まへを憚はばつて、何ともいわず、唯それとなく目色めいろで会え釈しゃくをした。

重吉は去年の一件からこの女が深沢の消息を知っていないとも限らないと思いついて、「お店はカルメンですか。春子さんと御一緒……。」

「ええ。」とつゆ子はもじもじしている。春子は側そばから、

「この方かた中島さんと仰おっしや有るのよ。去年同じ二階にいたのよ。」

「あら、そう。わたしつゆ子ツていいます。」

歩いて行く中、春子が二、三步先になつた隙すきを窺うかがつて、重吉は

つゆ子の側そばに寄り、「深沢とみ子ツていうのを知りませんか。松

岡の一件で……。」

「知ってます。」

「今いる処……。」

「ええ。」

折好く春子が行きちがう三、四人連づれの酔漢を呼留め、「彼氏、お茶でも飲みに行きません。」

重吉はこの隙ひまにお千代の住所を委くわしくつゆ子に教えた。

## 十三

お千代が娘のおたみを京橋区新栄町しんえいちようの女髪結おんなかみゆいの許もとにや

つたのは大正六年の秋、海嘯つなみの余波が深夜築地つきじから木挽町こびきち辺へんまで押寄せた頃ころで、その時おたみは五ツになつていた。

女髪結でいりさきの出入先に塚山さんといつて、もと柳橋やなぎばしの芸者げいしやであつたお妾さんおめかけがあつた。近処の縁日でおたみが髪結に手を引かれて見ているのを見てから、お妾さんはおたみをかわいがつて、浅草あさくさなどへお参りに行く時はきつと連れて行き、いろいろなものを買つてやつた。

二、三年の後のち、久しく寡婦やもめでくらしていた女髪結に若い入夫にゆうふができた。この入夫が子供嫌いでややもすればおたみを虐待するようになった。塚山のお妾さんはその家におたみを引取り小学校へ通わせていたが、とかくする中、女髪結は浮気うわきな亭主の跡を追

つて、夜逃よにげ同様にどこへか姿をかくしてしまつたので、行きどころのないおたみはそのまま塚山さんの妾しやうたく宅たくに養われてその娘のようになつてしまつた。

小学校もいつか卒業間際まぎわになつた時、同級の生徒の持つていた墓がまぐち口が紛失した。確たしかな証拠はなかつたが、おたみの様子が怪おかしいということになつて、学校の注意書が妾宅へ送られた。お妾さんはびっくりしてその処置を檀那だんなに相談すると、檀那は「構わないから家で遊ばして置け。」と言つた。

この塚山という人はその父から讓ゆずりう受けた或ある電気工場の持主であつたが、普通選挙の実施せられるより以前、労働問題の日に日に切迫して来るのを予想し、早く工場を売ばいきやく却やくして、現代社会

の紛擾ふんじょうからその身を遠ざけ、骨董こつとうの鑑賞と読書とに独善の生涯を送っていたのである。

震災の年おたみは十一になった。丁度小学校をよして裁縫のけいこに通つていた時である。お妻さんは日比谷公園ひびやの避難先から直様渋谷すくさましやへ家を借りたが、おたみは裁縫をならいに家を出たまま歸つて来なかつた。月日は四年を過ぎて、昭和二年の春お妻さんが丹毒たんどくで死のうという間際まぎわに至つても、その生死は依然として不明であつた。

然るに次の年の春、塚山が芸者をつれて箱根へ遊びに行つた時、同じ旅館の隣室りんしつに泊っていた六十あまりの老夫婦が、おたみの稚顔おさながおによく似た少女をつれているのを見て、様子をきくと、



果してその少女は年十六になつたおたみであつた。

老夫婦はもと箱崎町はこぎきちやうにいた金貸で、罹災の当日、逃げ迷つた道すがら、おたみを助け、その郷里の桐生きりゆうに往つて年を越し、東京に歸つて来てから、引取る人の尋ねて来るのを待つ間、娘も同様におたみを養育していたといふのであつた。

塚山はおたみをかわいがつていたお妾が病死した後、今では引取る人のない事を告げ、若いくらか干の金をも与えた上、この後も身の上の事については相談あずかに与つてやろうといつて別れた。

半年あまりを過ぎて、或日塚山は新潟まで行く用事があつて、汽車に乗つた時、再びおたみと金貸の老人とに邂逅かいこうした。老人は箱根から歸つた後間まもなく老妻を失い、話相手におたみをつれ

て伊香保いかほの温泉に行くのだという。塚山は老人の話をききながら、何心なくおたみの様子を見ると、わずか半年あまりの間に、殆どほとん見違えるように、すっかり大人らしくなっているのを怪しまずにはいられなかった。おたみの姿態と容貌ようぼうとは、そのどこやらに、年を秘かくしている半玉はんぎよくなどによく見られるような、早熟な色めいた表情が認められたからである。

塚山は六十歳を越した金貸と、十六、七になったおたみとの關係をいろいろに想像して、その真相を搜さがりたいと思ひながら、その機会がなくてまた半年ばかりを過した時、こん度は突然おたみの手紙に接した。

おたみは某処のダンサーになっていた。そして遠慮なく塚山に

金の無心を言つて寄越よこしたのである。

その後二年ばかり塚山はおたみの消息を知らなかつたが、偶然『毎夕新聞』の記事からその拘留せられた事を知り弁護士を頼んで放免の手續をしてやったのである。

「あの娘は盗癖があるかと思つていたが幸さいわいにそうではないらしい。万まんびき引すりや掏摸すりになられては厄介だが、あのくらのところで運命が定まればまずいい方ほうだろう。順当に行つたところで半玉から芸者になるべき運命もとの下もとに生れた女だから。」

塚山は弁護士と共にこんな事を語かたり合あつて笑つたのである。

塚山は孤児に等しいおたみの身の上に対して同情はしているが、しかし進んでこれを訓戒したり教導したりする心はなく、むしろ

冷静な興味を以てその変化に富んだ生涯を傍観するだけである。

塚山はその性情と、またその哲学観とから、人生に対して極端な

絶望を感じているので、おたみが正しい職業について、あるいは

貧苦に陥り、あるいはまた成功して虚栄の念に齷齪あくせくするよりも、

どぶどぶがわ溝あくた川むちほうつつを流れる芥あくたのような、無知放埒むちほうつつな生活を送っている方が、

かえってその人には幸福であるのかも知れない。道德的干渉をな

すよりも、唯些さしやう少さうの金銭を与えて折々の災難を救ってやるのが

最もよくその人を理解した方法であると考えていたのである。

或日塚山はおたみの手紙を受取った。小説のような長い手紙である。

わたくしは一生逢うことができないだろうと思つていたわたくしのほんとうの母に会いました。わたくしはこの事をあなた様に申上げなければならぬ義務があると思つてこの手紙を差上げます。どうして、どういう事から、ほんとうの母に逢つたかという事は、まるで、わたくしばかりでなく、母とそれからその愛人との秘密を暴露することになるのですから、あなた様の外ほかには誰にも言うことができません。わたくしの母は久しい以前からわたくしと同じような生活をしていたのです。ある時にはわたくしと母とは同じ家に泊つた事さえあつたはずなのですが、わたくしはお互たがひにそれを知らずにいたのです。わたくしは母とは知らずに仲間のものか

ら年増としまたちばなの橘千代子さんという女の噂うわさを幾度も聞いたことさえありました。（橘千代子というのは母の偽名なのです。）またわたくしの友達をつゆ子という女が二、三年前、母が麻布あさぶの谷町たにまちにいた時分、雨にふられて一晩その家に泊ったことさえあつたのです。それだのにわたくしたちはお互に出会う機会もなく、またお互に知り合う機会もなかったのです。東京は実にひろいところだと思いました。

二、三日前につゆ子さんが突然たずねて来て、是非わたくしに逢いたいという人があるが逢ってくれるかどうかということです。つゆ子さんは去年の暮わたくしたちと一緒に罰金を取られてから、今では銀座四丁目裏のカルメンというバーに

働いています。わたくしはつゆ子さんのはなしを聞いてびつくりしました。ほんとうの母がわたくしと同じようなことをしている女だと知った時、わたくしは悲しいと思うよりも、嬉しい<sup>うれ</sup>いといつては変ですが、何だか親しみのあるような心持がしたのです。そのためか、わたくしは母がわたくしを人の家へ養女にやってから、今日まで永い年月の間わたくしを尋ねずにいた事を思い出しても、その時には母の無情を怨む<sup>うら</sup>ような気が起つて来なかつたのです。母がもし立派な家の奥さんになってもなっていたなら、わたくしはかえって母を怨みもしたでしょう。また身の上を恥じて、どれほどに逢いたくても顔を見せる気にはならなかつたらうと思います。母の方でも

やはりそういう心持がしていたようです。お互に恥かしいと思う心持がその場合遠慮なくわたくしたち二人を引き寄せてくれたのです。

わたくしは急いで はっちようぼり 八丁堀の母の家へ出かけて行きました。母のことは大体友達をつゆ子から聞いていましたから、午後がよかろうと思つて、三時頃にたずねたのです。十二、三の こおんな 小女が取次に出て、二階へ上つて行きました。すると、母は ね 寐<sup>ね</sup>ていたものと見えて、 ゆかた 浴衣の ねまき 寝衣<sup>ねまき</sup>の前を合せながら降りて来て、

「さア、お上んなさい。よく尋ねて来てくれたねえ。」  
わたくしは何と言つていいのか、胸が一ぱいになつてその



ままだまつて下座敷の茶の間らしい処へ通りました。母は羽織をきてくるからといって二階へ上つて行つたまま暫くして、も降りて来ませんから、お客でも来ているのかと気がついて、また出直して来ようかと思つていと、梯子段に登音がします。一人ではなく二人の登音らしいと耳をすます間もなく、唐紙があいて、

「あら布団ふとんもしかないで。さア。」と母は長火鉢むこうの向に坐りすぐ茶を入れようとしみます。わたしは「お久ぶりひさし」とも言えず、何といつて挨拶あいさつしていいのかちよつと言う言葉に困つて、

「おいそがしいの。」といいました。よく仲間同士で挨拶の

かわりに使う言葉です。ここでこんな事をいうのは、後で考  
えると実に滑稽こっけいです。母はそれを何と聞いたのか、別に気  
まりのわるい顔もせず、

「お客じやないの。紹介しなければならぬ人だから。」  
「母かあさんの彼かれ氏……。」

その時四十前後の男の人が唐紙の間から顔を出して、

「いらつしやい。去年の暮から随分方々をたずねたんですよ。  
知らない時はいくら尋ねても知らないもんです。」と言いな  
がら母のそばに坐りました。わたくしは友達のつゆ子から聞  
いて名前まで知っていましたから、改めて挨拶もせず、

「つい近処にいなながら、不思議ですねえ。」といって笑いま

した。

「つゆ子さんとは始しよつちゆう終しゆう一緒でしたか。」と彼氏がききま  
す。わたくしは初め新しんじゆく宿しゆくのホールでつゆ子と友達になり  
同じ貸間にいた事や、それから同じ時につかまってダンスア  
の許可証を取り上げられて、市内ではどこのホールにも出ら  
れなくなつたので、五反田ごたんだの円宿のマスターに紹介してもら  
つて、この方面へ転じたはなしをしました。

母はわたくしに名前なまえをかえ変るとか、何とか方法を考えて、も  
う一度ダンスアになるか。それともつゆ子さんのように女給  
さんになつた方ほうが安全ではないかと言います。わたくしはダ  
ンスアも初めの中は面白いけれど、それが商売になつて、す

こし飽<sup>あ</sup>きてくると、労働が激しい上に、時間で身体を縛られるのがいやだから、二度なる気はない。また女給さんもつゆ子の通っているような店は、往来へ出て見ず知らずの人を引<sup>ひ</sup>張<sup>つば</sup>るのだから、万一の事を思えば、危険なことは同じだと言つて、その事情をくわしく説明しました。

母はわたくしに貸間の代を儉約するために母の家に同居したらばといい、それから、もう暫くこの家<sup>つれこみぢや</sup>にいて、貯金ができたら、将来はどこか家賃の安い処で連<sup>つれこみぢや</sup>込茶屋でもはじめるつもりだといいます。すると彼氏が、貯金はもう二千元以上になつたと側<sup>そば</sup>から言い添えました。

わたくしは今まで行末のことなんか一度も考えたことがあ

りませんから、弐千円貯金があると言われた時、実によくか  
せいだものだと、覚えぬ母の顔を見ました。母は十八でわた  
くしを生んだのですからもう三十七になります。それなのに  
髪も濃いし、肉づきもいいし、だらしなく着物をきている様  
子は二十七、八の年増としまざかりのように見えます。外へ出る時  
はもつと若くなると思います。わたしがホールにいた時分に  
も、やはりお金をためて貸家をたてたダンサアがいましたが、  
その人よりも母の方がなお若く見えます。ダンサアで貸家を  
たてた人は、みんなの噂では少し低能で、男のほかいうことは何  
でもOKで、そして道楽はお金をためるより外ほかに何もな  
い人だと言うはなしでした。母もやはりそういう種類の女ではな

いかと思われます。一目見ても決してわるい人でない事がわかります。若く見えてきれいですが、どこか締しまりのないところがあります。人の噂もせず世間話も何もない人のようです。こういう人が一いっしん心になつてお金をためると、おそろしいものです。

わたくしは母がわたくしの父になる人を今でも知つているのかどうか尋ねて見たいと、心の中では思つていたのですが、その日は話の糸口がなかったのと、またわたくしも初めから父というもののあることを知らずに育つて、一度もそういう話を聞いた事がないので、さほどに父を恋しいとしたう心がありません。それ故その時は初めて逢つた母に対して強しいて

父の事をきいて見ようという気にもならずにはいたのです。わたくしが懐なつかしいと思うのは見たことのない男親よりも、わたくしを育ててくれた船堀ふなほりのおばアさんです。おばアさんが死んだのはわたくしが三ツか四ツの時分でしたから、その顔もおぼえてはいません。しかし夜たった一人で真暗まつくらなところにおいて、一つ処をじいつと見詰めていたり、また眠られな  
い晩など、つかれて、うつらうつらとしている時などには、  
どうかすると、おばアさんの姿と、川のある田舎の景色がぼんやり見えるような心持のする事が時々あります。それは幻  
とでもいうのでしよう。懐しいといえればそれは震災前新栄しんえい  
町ちやうにいらしたおばさんとそしてあなた様の事です。わた

くしの一生涯で一番幸福だったのはこの前も手紙で申上げましたように、それは新栄町のお家にいた時です。おばさんを手をひかれて明石町あかしちようの河岸かしをあるいて蟹かにを取って遊んだことは一生忘れません。わたくしの一番幸福な思出は二ツとも水の流れているところですよ。そして懐しいと思う人はお二人ともおなくなりになりました。

わたくしは暫く母のところ同居することにいたしました。また変ったことがありましたら、お知らせをいたします。ではさようなら。

一九三二、二、十六日。

たみこ







## 青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 六」岩波書店

1986（昭和61）年10月9日

初出：「中央公論」

1934（昭和9）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「バア」と「バー」の混在は、底本通りです。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ひかげの花

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>